

第六版

伊藤

銀月

著

第一

回

目

次

伊藤銀月君著

隆文館藏版



詩化せられたる海賊	一
日本建國の四大英雄	七
上古の海國の大活動	元
海國的意氣の銷沈期	元
蒙古の來寇に報復す	五
英雄的海賊大王の傳	五
倭寇素の濃密なる時	五
倭寇素の稀薄なる時	五
彼の眼に映ずる倭寇	一五
我が海賊と豊臣秀吉	一五
禁過後の海賊的奇傑	一五
海賊が説明する日本	一五



210.1
I 178m
(6)

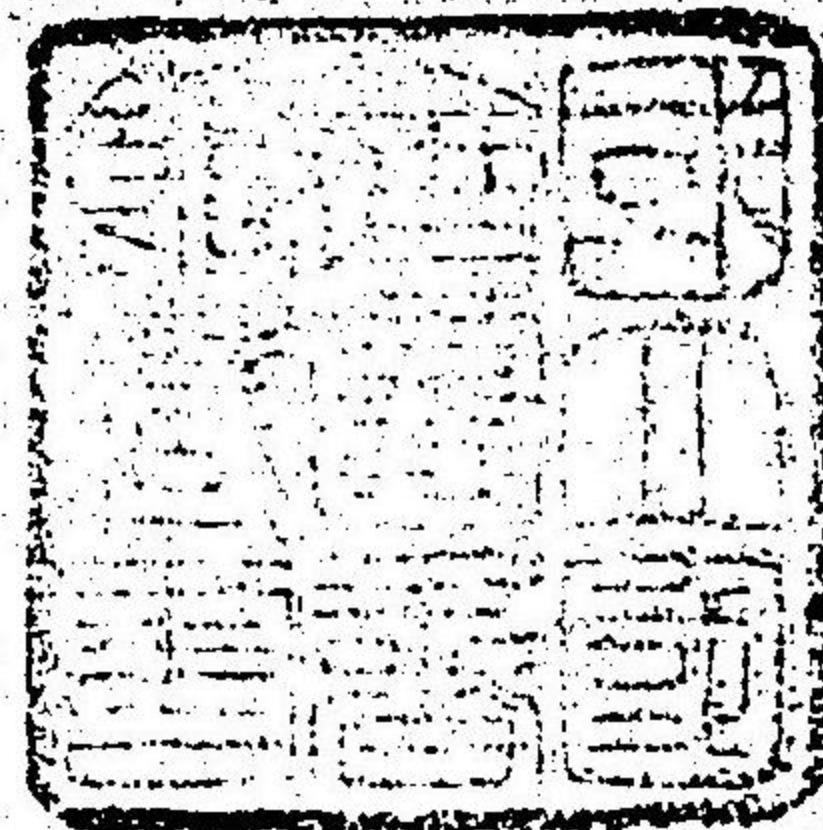
自序

別に書くべき理屈もなけれど、唯云はて已みては何となく物足らぬを覺ゆる二つの事實あり、开は、此書に筆を執れる間不思議にも予の氣が立ちて、頻りに人と衝突せし事也、今一つは、別に運動もせざるに、腕が太く力が強くなり、盛んに食の進みたる事也

明治三十七年十一月三日

銀月識

白序



印刷の方式及び表紙の意匠は人情觀的日本史の例に依るべく予より隆文館に申込みたりこれは文祿堂主人の考に成りたるものなれど頗る予の趣味に合せるを以て譜を得今後凡て予の歴史的著述に之を用ふることに定たる也

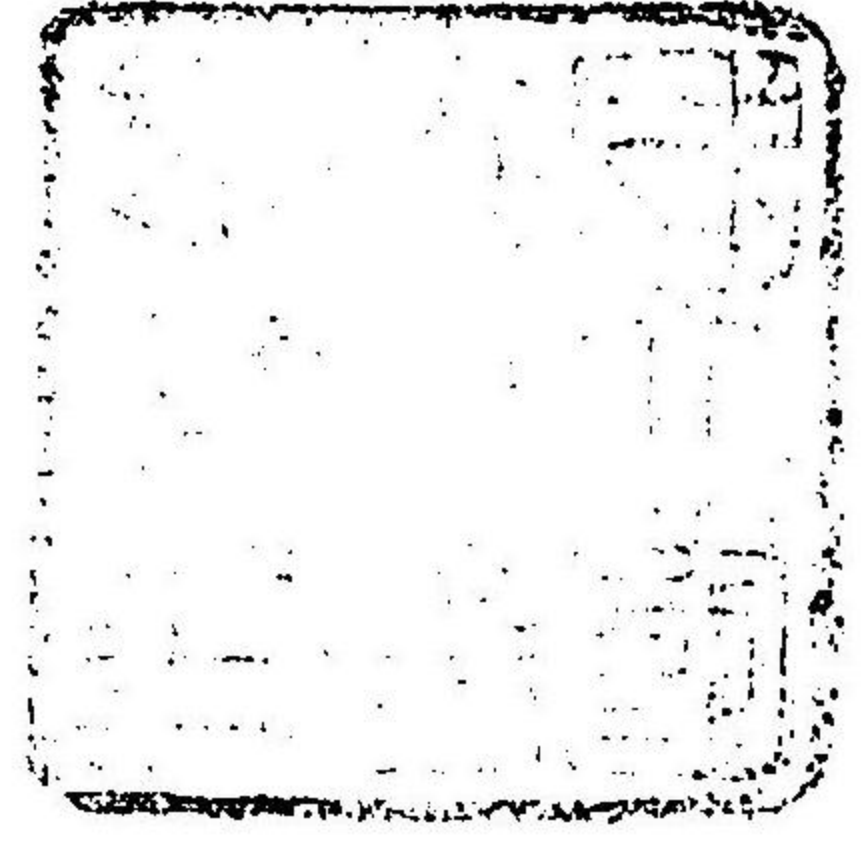
銀

国立国会

27.11.22

図書館

281990



印刷の方式及び表紙の意匠は人情観的日本史の例に依るべく予より序文前に申込みたりこれは文藝堂主人の考に成りたるものなれど願ふ所の趣味に合せるを以て諸君得今後凡て予の歴史の著述に之を用ふることに
する也



281960

210.1
I 978m
(6)

自序

別に書くべき理屈もなければ、唯云はて已みては何となく物足らぬを覺ゆる二つの事實あり、一は、此書に筆を執れる間不思議にも予の氣が立ちて、頻りに人と衝突せし事也、今一つは、別に運動もせざるに、腕が太く力が強くなり、盛んに食の進みたる事也

明治三十七年十一月三日

銀月識

自序

編中の慣用語

- ▲河野流
- ▲島根性
- ▲負嫌ひ
- ▲愛土病
- ▲金の鋏形の兜

編中重要な人物

- 伊弉諾尊 天の浮橋を乗り廻はして日本を経略に来りたる人
- 伊弉册尊 女權擴張者の元祖にて所夫と干戈を交へたるの人
- 神武天皇 徳川家康型の人物
- 稻飯命 氣が荒く獏獏持なりし神武天皇の兄
- 神后皇后 男が鼻毛を抜かれしカタキを女が代つて討ちたる激昂の人

藤原純友

及門より影響の多き人

河野通有

日本人に河野流と云ふ痛

村上師房

南朝の忠臣北島顯家の子にて

懷良親王

明帝に刺客を送りて四百餘州

李成桂

倭寇討伐の偉功ありし英雄

白頭の崔萬戸、美少年の倭將

王直

倭寇の大資本主、大間臣、司令長官、一萬

蝴蝶陣の大將、榴花軍の水滸傳的惡僧、策士胡宗憲

豐臣秀吉

倭寇を禁遏して更に大規模の倭寇を出だしたる人

原田孫七郎

英雄秀吉を傀儡に使うて世界を動かさんと企てし鼻祖

山田長政

情實に拘泥して亞細亞半島の主權者たり得ざりし人

狂漢呂宋助左衛門、妖人天竺德兵衛、義士鄭成功、怪男兒濱田彌兵衛、小さくして辛き高田屋嘉兵衛、鼻雄錢屋五兵衛、郡司成忠、奥平忠善、相川之賀

死史活史

銀

月

死史とは何ぞや、考證又考證、考證の外に史料無きもの、如く、活潑なる人間社會の歴史を擧げて、素性怪しき反古紙及び士より掘りたる瓦の缺の中に埋め去らんとす、其無味にして而も障礙りなること木皮を嚼むが如し、
是れ死史なり

活史とは何ぞや、

古代より今代に連りて、人間社會の歴史を一貫する活ける潮流、治亂の機、興亡の勢、及び其機と勢を支配する微妙なる心的作用、凡て是等のものを發生する所の原動力を包める活ける潮流を看取して、數百年間若しくは數千年間の事蹟を語ることに、掌を指して其筋肉の組織を説くが如し、即ち是れ活史！

考證を重ねざるにあらず、反古紙と瓦の缺を輕んずるにあらず、時として、是等の物が塚中の枯骨に代つて聲を發すること無きにあらず、然れども、悉く其枝葉を除き去りての歴史を見るときは、必ずや普通に傳へられぬ一般に信ぜざる、大體の事實の連絡あり、是れ歴史の幹部也、反古紙と瓦の缺は如何に多くとも、此幹部は動かすべから

260. /
IX 第9
(6)

日本海賊史

伊藤 銀月 著

詩化せられたる海賊

山賊は病死的、鬱念、海賊は詩的、空想……海賊に對するの美譽……子の海賊主義……子の白日夢

山賊は本語の裏面には、殘忍、貪欲、暴戾等、あつた。海賊は本語の裏面には、豪爽、淡泊、瀟灑等、あつた。意味を包めり、海賊て本語の裏面には、豪爽、淡泊、瀟灑等、あつた。の裏す、本語の裏面には、山賊と云ふは、直ちに大江山酒香童子の事を想像す、海賊と云ふは、直ちに關山王に對立して、海賊は半ば詩的、空想らし、快男兒の徒を偲出す、山賊は消極的にして、海賊は積極的也、山賊は單に精神の欲念に支配せらるる者にして、海賊は半ば詩的、空想

詩化せられたる海賊

海賊の詩化

に驅られたる者也、故に山賊には半點の美無く、海賊には多くの美點あり

遠征、經略等の語に多量の醗酵的分子を含みて、能く青春の血液を沸騰せしむるの力を失はざる限りは、人は海賊に對するの詩的感想を滅却すること能ふまじ、海賊の醇なる者海賊の精なる者に至りては、或意味に於て膨脹的國民の先導者なれば也、遠征、經略の門戸を開く者に外ならざれば也、古へより、國家が海外の地に人民を移植し、以て新領國を建設し得たるもの多し、而も其最初の動機を問ひ來らば、何れか海賊的心理作用に鼓舞せられたる結果にあらざらん、未開の土地を探り得て新社會を組織せんとする、亦是れ海賊が負ふ所の意氣海賊が嗜む所の趣味と、其意氣其趣味の根原を同うするもののみ、詩人バイロンが海賊を詩化して、自ら海賊主義を取るに至りたるも、海賊の壯美なる一面に心酔せし結果ならずとする

こと能はず、海賊なる哉、海賊なる哉

醉にして自ら詩化したるの海賊は敬愛すべし、長き海岸線を有し若しくは全く海岸線に包まれたる土地に住するの民族にして、毫も海賊的趣味を帯ばざらんか、开は胸に彈ずべき琴線無きの非音樂的木人のみ、頭に波だつべき血液無きの非詩美的土偶のみ、我等の祖先は自己の木人士偶にあらざるを示すべく、しほらしくも其行動に多量の海賊的趣味を帯ばしめしもの、如し、然りと雖も、歴史及び地理は一面に於て詩美的音樂的なる日本人を誘導して海波と親ましめつゝ、却つて他の一面より之を阻隔して海波に遠ざからしめたり、此背馳せる兩極端の作用の中間に、我等が多大の興味を以て研究すべき問題は横たはれる也、東京市中猶ほ海賊の事蹟を刻印して銷磨せざるの部分あるにあらずや、海運橋は是れ往昔の海賊橋にして、海賊の文字を忌み今の名に改められたりと雖も、歴史は今猶ほ人を

刺戟して舊名を忘却すべく遲鈍なるを許さず、予をして此橋を渡る毎に一種の威懐の起るを禁ぜざらしむ、开は悪威の或種類にあらず、不思議にも一種の豪快を帯べる美感にてある也。

銀月年少にして氣を負ひ、好んで天下奇傑の士及び市井豪傑の徒に交はり、海外に向つて雄圖を披かんとせり、而も志大に才疎にして十年の畫策悉く心と違ひ、落魄して終に帝都に留まり、所謂文士の班に入る、然りと雖も、紙を展べ筆を拈るは元來予の長とする所にあらず、一生文士を以て終るも亦予の本意にあらず、機會若し到らば遠征の船を放ちて蠻國を波濤の外に探るべく、爾らざんば孤島を索め得て理想の社會を建設すべく、念頭一日も此空想を熄滅せしむること能はざる也、予が文學を以て遊戯となし、生を計ること禪僧の如く、甚だ世情に淡くして、日常の事に就いて何等の主張無きが如くに見ゆるは、其實極めて贅澤に極めて我儘にして、尋常一様

Handwritten mark

の事は到底己れを満足せしむるに足らずと既に定められたれば也、要するに予の趣味は海賊的趣味にして、露骨に云へば予の主義は海賊主義也、予が歴史、地理、人類、生物の科學に興味を有すること深きも、海賊的趣味の反射作用に外ならざる也、バイロンはバイロンの趣味に合すべく海賊を詩化し、予は予の趣味に合すべく海賊を詩化せり、予は深くバイロンの海賊主義を解すること能はずと雖も、充分に己れ自身の海賊主義を解せり

文字畢竟是れ遊戯、然れども遊戯却つて自己の天真を流露するものとせば、日本海賊史は或意味に於て予の自白録ならざるべからず、否、實に予が出ださんとする一大自白録の前提にてある也、予は今日本海賊史を編するに臨みて血沸き肉動くの情に堪ふること能はず

日本建國の四大英雄

大陸島の特質……日本と英吉利……天の浮橋とは何ぞや……伊弉諾伊弉册二尊の人物……地理と歴史の感化……神武天皇の人物……稻飯命……此土愛すべし此土惜むべし

元是れ大陸の一角なりしと雖も、他に制馭せられ他に抑壓せらるゝを厭ふの餘り、海水の破壊作用及び土地の漸降作用を借りて中間の地盤を陥落せしめ、母陸と分裂して獨立の肩を貸やかしたるもの、地理學上之を大陸島コンチネンタルアイランドと稱す、故に大陸島に於ては、其一塊石一莖草にも獨立の氣充滿して、特殊の姿致を呈し特殊の發達をなし、緊密にして勁拔、母陸に於けるが如き平凡にして粗漫なる物あるなし、隨つて其住民の獨立性顯著に獨立力強大なること、他に比肩すべき

者を見ず、歐羅巴に於ける英吉利、亞細亞に於ける日本、諸君記憶せよ共に是れ大陸島にてある也

地と人との關係斯の如く夫れ重大也、而も大陸島に於ける地人合一の獨立性獨立力は、唯其發達を溫帶地方に認め得べし、サツカレシ島即ち樺太の如き、同じく是れ大陸島の一に數ふべき分裂せる陸塊也と雖も、氣候の寒冷と位置の偏僻は其地と其人より共に獨立の性と力とを奪ひて、今日猶ほ曖昧なる存在をなすを免れしめず、日本の如き英吉利の如き中和の位置を占むる大陸島にして、始めて此天則を有効ならしめ得る也、換言すれば、大陸島に於ける地人合一の獨立性獨立力は、地球に於ける其島の位置に支配せらるゝ也、而して更に一疑問あり、同じく中和の好位置を占めつゝ、何故に英吉利人は冷強沈重にして日本人は輕快洒脱なる、曰く、是れ一半は人種の差異に關する問題也と雖も、亦氣候と地理との合併作用が住民

の心意に與へたる感化の差異をも問はざるべからず、英吉利の風物の陰鬱蒼涼なる、日本の光景の明麗秀潤なる、各々此疑問に向つて一半の解釋を與へつゝある也

上古、此島地の絶好なる氣候風景及び豊富なる産物は、地上の樂園として大陸の民を垂涎せしめしものゝ如し、而して、朝鮮半島より及び大陸より朝鮮半島を経由して此島地に來りし紀元以前の民は、其行動を標準として之を三種に分ち得べし、(一)單純なる移住の目的を以て來りたる者、即ち少彥名命の類、(二)單純なる劫掠の目的を以て來りたる者、即ち彥火々出見尊及び鷓鴣草葺不合尊の時代に九州に來寇したる半島の大海賊隊、(三)移住と劫掠と兩様の目的を以て來りたる者、即ち伊弉諾尊伊弉册尊の類是れ也、否、予は濫りに劫掠の文字を用ひて祖宗の威靈を瀆さんとする者にあらず、諸册二尊の渡來は移住に兼ぬるに或る他の目的を以てしたるものにて、其行動

高く劫掠以上に抽んず、名づけて之を征略と云ふ、劫掠は盜賊の事業にして征略は英雄の事業也、予は先づ諸君に向つて、我等が祖宗の英雄なりしことを記憶せよと乞はん

男性
女性
英雄
英雄

爾り、諾冊二尊は一對の大英雄にして、地上の樂園に其經綸を行ふべく、天の浮橋に立ち天の瓊矛を以て滄溟を探りつゝ、東方に遠征を試みたる也、天の浮橋は即ち獨木舟の類にして神代の軍艦に外ならず、天の瓊矛を以て滄溟を探るは、干戈を用ひて海中に新領土を求むるものゝみ、其鋒滴の凝つて先づ礮取盧島となりしを見れば、日本の大陸島より九州四國其他無數の小島を分離せしめし海水破壊作用の結果なる瀬戸内海が、其絶美なる風景と絶好なる氣候とを以て、祖宗の遠征軍を茲に招き到らしめしものなるを知るべし、即ち日本の大陸島を分裂せしめたる日本海は、祖宗を誘導して大陸の外に出てしめ、九州四國を分裂せしめたる瀬戸内海は又、日本に於け

る祖宗の根據地を指示したる也、鋒滴凝り成して征服の効を奏したる礮取盧島は、今の淡路の西南隅なる一小島沼島と呼ぶもの是れ也、歴史と地理の關係何ぞ其れ深きや

地中海が歐洲文明の産出所たりしが如く、東方の小地中海たる瀬戸内海は、實に日本人の性格を作り日本人の抱負を作り日本人に向つて何を爲すべきかを教へたるの母なりし也、伊弉諾が非凡の人傑たりしは言を俟たず、伊弉冊尊亦稀に見るの女英雄にして、其子大日靈貴とは全く面目を殊にし、後世の神功皇后と酷だ相似たり、諾冊二尊の英雄的資質は瀬戸内海の絶美なる風光に觸れて其蓄める花を開き、高く實我を超えて一種詩的趣味を帯べるものとなれり、而して、英雄の驥尾に附する者が其威化を受けて英雄的氣風を帯ぶるものなる、多くの史上の實例を知れる人は、諾冊二尊が瓊矛の下に従へる開國の元勳の、皆尋常人にあらざりしを信ずるに躊躇せざる

大日靈貴
尊は即ち
天照大神

なるべし、此に於て二尊は破取慮島を根據地となし、天の御柱を立て八尋殿を造りて暫く家庭の趣味を嘗めしが、煙波の間に書かれたる四圍の薄紫なる島山を眺むるに附け、英雄的功名心勃々として抑へ難く、乃ち糧食を貯へ兵士を養ひ舟楫を集め、二手の遠征軍を發して、一手は男將軍之を指揮し一手は女將軍之を指揮し、威武共に神の如くにして、向ふ所風靡せざるは無く、驚くべき征略の功を奏して、淡路、四國、隱岐、筑紫、伊岐、津島、佐渡、大倭、豊秋津島の八島を生み、次に是等の滄海、山川、草木、風火を支配すべき諸神を生み出だしたり、語を換へて云へば、二尊の艦隊は日本の大半を征略し、而も之を征略するに隨ひ、適當の人物を選抜して各地の支配たらしめし也、之に依つて、諸冊二尊が單に將軍としての大人物なるのみならず、亦政治家としての大人物なりしことを知るべし、中頃一たび諸冊二尊の間に夫婦喧嘩を起し、互に干戈を交へし

伊岐は今の豊秋津島は今の對馬

ことありしが如き、如何に冊尊の御轉婆にして女權擴張家なりしかを見るべからずや、海神の駿馬なる八尋の鰐と云へば當時の大戦闘艦にして、一尋の鰐と云ふ如き小巡洋艦もありき、是等の小舟に乗じて波間に出没しつゝ、大陸と往來すること隣舍を訪ふに異ならず、四方を経略して席上に老るを耻となし、我等の遠祖は、實に海上の健兒として世界の何の種族に對するも遜色なかりし也、而して、此一對の英雄の間に生れたる、姉なる大日靈貴尊及び弟なる素盞鳴尊は、俱に父母を凌ぐの人傑にして、諸冊二尊の事業は此二麒麟兒の爲めに大なる膨脹をなし、且つ組織的秩序的のものとなることを得たり、此夫婦親子同胞四英雄の抱負は如何に偉大なるものなりしぞ、而して其周圍に對するの感化力は如何に強烈なるものなりしぞ、如何に日本の絶美なる風景と絶好なる氣候は、其抱負を養ひ其感化を助くるに與つて力ありしぞ、斯くて日本人は愛國自尊の民となれり、

朴・孫・命・の・は
孫・飯・命・の・は
孫・飯・命・の・は

而も半島の上古史に就いて我が史家の研究する所に依り、新羅の始祖赫居世干は楊山の麓に於て卵を剖いて生れたる者にして其姓を朴と云ふと記せるは、是れ稻飯命が卵形にして瓠の如き舟に乗じて到りしを意味するものなるを知れり、朴は朝鮮語の瓠也、朴を姓としたるの理由は此に在る也、蓋し、當時の日本人は眞個に波濤の健兒にして、海を見ること席の如く、瓠舟に乗じて大陸及び半島と交通するを尋常茶飯となし、却つて長髓彦の據れる大和を征するを難事の如く思ひ做せし也、稻飯命が忽ち痼癩を起してタツタ一人の朝鮮征伐を始めたる、其意氣は後世の倭寇を催起するの原動力となれり、然れども稻飯命は新羅の始祖となりて國家を創立し、倭寇は單に海賊を働いて歸りぬ、後人何ぞ前人に劣るの甚だしきや

斯の如く、上古に於ては、海外より來りて日本に國家を創立したる者あり、日本より去りて海外に國家を創立したる者あり、我等の

祖先は確に膨脹的性質を有したる有爲の民族に相違無かりし也、然るに、後の倭寇が支那朝鮮安南暹羅等を第二の故郷として、母國を離れたる新天地を開き、亞細亞の一半を日本化すること能はざりしは何が故ぞ、是れ日本の風景の餘りに美に日本の氣候の餘りに快くして、人を魅すること魔の如く、人を酔はしむること酒の如く、外より來りたる者をして再び辭し去るに忍びざらしめ、外に赴きたる者をして永く留まるに堪へざらしめ、終に日本人の遺傳的愛土病を長成するに及びたるが爲めなるのみ、此土愛すべし、此土憎むべし、嗚呼

居世干は
古半島語
にて王と
云ふ意味
也即ち赫
居世干は
赫王也

上古の海國的大活動

貿易・侵略・二つながら用ふ……甘く御人好き日本
人……神功皇后の性格……武内宿禰の人物……
神功皇后が征韓の功果と倭寇との關係

建國の當時より、寧ろ建國の以前より、日本人は貿易・侵略・二つながら用ふるの倭寇なりしが如し、蓋し、貿易・侵略・二つながら用ひて半島及び大陸より來り、終に日本に土着するに至りたる者の兒孫が、却つて貿易・侵略・二つながら用ひて其祖先の地に酬うるに至りたるものゝみ、朝鮮半島の上古史に依れば、新羅の始祖赫居世干が即位八年に當り、倭人大舉して來寇せしが、王の神徳あるを聞き干戈を收めて返りぬと録せり、何ぞ夫れ王の神徳あるを聞きて空しく返らん、此段の消息推知するに難からず、我が皇帝の兄君稻飯命が新羅の王

なるを聞き、之に恭敬の意を表して侵掠を中止し去りたるもののみ、而も他の一面に於ては、後漢の武帝が朝鮮を征服せしに就いて、倭人の三十餘國が俄に支那と接近し、半島を經由して大陸と交通するに至りたること、後漢書に記する所に依りて明か也、武帝は畧我が建國と時代を同するの人なれば、我が地方豪族或は國造の類が、當時既に侵掠艦隊の外に武装したる貿易船隊を送り、頗る冒險的な商業を營みつゝありしを知るに足るべし、此の如くして、我が國人の極めて彈力に富めること、即ち彼等の間より出でし者の兒孫が特殊の地理と特殊の歴史に其性格を作られて、彼等と全く摸型を異にするの民族となりたることは、漸く大陸及び半島の住民に認められ來れり、武帝の時代に、筑紫の海神國わかづみのくにの主長が使ひを漢に送りて委奴國王の印を受けたるが如き、何ぞ其意氣の壯にして彼に認めらるゝことの大なりしや、此時に當りては、大和朝廷の主權猶ほ未だ

委奴國は
今の筑前
怡土郡の
地也

筑紫の全部に及ぶこと能はず、海神國の主長が大陸の皇帝より國王の認可を受けしも、自ら己の欲する所を縦まゝにしたるものにて、他人の容喙すべき問題にあらず、後世の足利義滿が日本國王の封冊を明より受けたる不臣の態度とは、固より同日の論にあらざる也、半島上古史の所謂倭寇は、委奴國王一流の豪氣自ら抑ふる能はざる輩が、貿易上の交通を平凡なりとして侵掠の趣味に耽るに至りたる者を意味し、南北朝時代海賊の大首領たる伊豫の河野の祖先も、或は此輩の分子中に含有せられつゝありしやを知らずと雖も、一面に於ては我が國家より送りたる軍隊をも同じく倭寇と稱して、玉石混淆の待遇を與へし例證無きにあらず、垂仁天皇の三年即ち紀元六百三十四年任那我に請ひて新羅の境界に横はれる三已汝の地に鎮將を置き、兩國の紛争を防遏すべく協りしや、頭に三岐の贅肉ありて相貌奇偉勇力絶倫なる將軍鹽乘津彦は、我が政府に選拔せられて其

地に赴きぬ、是れ任那に日本府を置きたるの胎まりにして、日本の對外史上最も記憶すべき重要事なるが、是より後任那の日本府を中心として活動せる我が軍隊をば、韓史は失敬にも明かに記して之を倭寇となせり、要するに我等の祖先は剛健質朴の民にして、最初大陸及び半島の浮華柔媚なる氣風を厭ひ、日本に來りて新天地を開き新生活を創めたるものなれば、伊弉諾伊弉冊以來茲に十數代にして、猶ほ且つ自然の兒たる眞率の氣を失はず、文明に誇れる大陸及び半島の民の眼には、粗獷魯直與し易きの種族として映ぜしもの、如し、簡明に云へば彼等より一段の階級を下りたる半開の民として映ぜしもの、如し、彼等が如何に自ら高うして我を蔑視するの甚だしかりしかは、半島の政治家が表面恭敬の色を呈して我が軍隊を自己の用に利しつゝ、裏面に於ては倭寇倭夷と其史書に記録して憚らざりしに依りて測ることを得べし、彼等が願みて紅舌を吐く狡狴の態、今

日猶ほ眼前に活現するを覺ゆ、同時に我等の祖先が御人好しの有様も亦想像するに難からざる也、彼等は何處迄我を甘く見る積りにや、終には筑紫の熊襲を使囂して我が中央政府に反せしめ、自ら手を濡らさずして日本を混乱せしむるの惡戯を試むるに及びぬ、姦猾も此に至つて極まれりと云ふべし、而して我等が祖先の甘く御人好き、斯る惡戯にも充分の功を奏せしめ、其結果景行天皇を勞し、仲哀天皇の陣中に崩ずるを見るに至り、二千歳の下猶ほ多血なる同胞をして切齒扼腕せざる能はざらしむるの遺憾を留めしが、英雄神功皇后奮起して、始めて吾人の溜飲を下げぬ

蓋し神功皇后の眞意たる、一には日本人の必ずしも甘く御人好しにあらざるを示すべく、二には彼が頻りに誇示する所の文明なるものを奪却して、齋に油揚を浚はれたる阿三の如き間拔面を作らしむべく、大に激する所ありて新羅の征討を決行したるものなれば、其

神功皇后
人物

武内宿禰
人物

遣り方の何處迄も女性的にして、鼻毛を抜かれたる男の耻を女が代つて雪ぐの態を帯ぶること、咀嚼して盡さざるの妙味あり、其綸を垂れて吉凶を占ひ、頭を海水に滌いて髪自ら二つに分れよと祝せしが如き、以て女性の特色たる迷信の氣味を見るに足るべく、臨月の身を以て甲冑を被り、石を挿んで出産の生理的作用に抵抗し、海を渡つて異域に赴き、其王を降すに至る迄休まざりしは、是亦非常の場合に當りて男性より強き者となる女性の特色にして、到底男性の能く堪へ得る所にあらざる也、神功皇后は古今の大英雄なりと雖も形は女にして心は男なるが如き怪物的英雄にあらず、一寸一分も女性の軌道の外に逸出せざる眞に婦人らしき婦人なる也、輔弼の老臣たる武内宿禰は、痒き所に手の届くやう智慮の煉れたる男にして、斯る女主人公の性癖を十分に呑み込み、其御機嫌を損ぜずに而も善導し、軍陣の謀議、將士の部署より、出産の介抱、皇子の抱き守り

に至る迄、何呉れと世話を焼きて、勿々如才無く立廻りたる、多少老翁の分子を含みたる白頭翁なりしが如し、俗書亦侮るべからず、武装せる神功皇后の傍に嬰兒の應神天皇を抱ける武内を添へたる古き繪紙を見る毎に、予は這裡の消息を正史以外に傳へつゝあるを愛す、皇后の痛烈なる慷慨悲憤より出でたる大決心と大目的は、實に此石橋を杖に叩いて渡るが如き堅實なる老臣の智慮に融和せられて、始めて組織的事業を結果し得たりしもの、如し

見よ、神功皇后が征討軍を起せるを聞きて、例の侵掠的倭寇の種類となし、得意の口舌を用ひて談笑の間に之を籠絡し得べきもの如く輕視せし半島人は、天兵一たび至りて、其崇高の容其壯嚴の態其雄大の氣、全く彼等が眼に熟せる倭寇と同じからざるを望むや、神飛び騰落ちて手足措く所を失し、先づ新羅王が面縛叩頭の來降となり、高麗、百濟が新羅に倣ふの態度となり、皇軍留まること僅に

五十餘日にして、鷄林入道の山河亦一草一木の我が旗風に靡かぬもの無きに至りぬ、皇后が軍を進めて新羅の國都に入り、府庫を封じ文書を收め、金銀絹帛船八十隻に積みて歳貢せしむるの誓ひを定め、杖つき給へる矛を取つて其城門に立て、以て萬世背くべからざるを彼に知らしむるの標識となしたるに當つてや、特殊の地理と特殊の歴史の上に發育し來りたる日本人の風采と意氣は、如何に彼等を照射して顔色無からしめしぞ、此に於て、日本人は再び彼等の翻弄に價すべき甘く御人好しの民にあらず、彼等が誇示したりし文明も亦彼等の專有物にあらずる也、神功皇后が功業は、功業其物として既に甚だ大なるのみならず、其後世に與へたる遺勳は寧ろ其れに數倍せり、文明輸入の史的法則として、皇后が武力を用ひて齎らし歸れるは形而下の文明に過ぎざりしと雖も、當時皇后の腹中に在りし皇子が位を繼ぐに至りて、形而上の文明は半島の學者及び書籍美術と

共に我國に流れ入り、皇后の孫に至りて、文明を消化し得たる驚くべき大結果を收めたり、而して予が特に諸君に記憶を乞ふべき一條あり、并は神功皇后の征韓が日本人に著るしく自尊の念を加へしめ、外國を輕んじ異民族を侮りて、自ら他より一段高く大なる者となすの氣象を養ひたる事也、中頃唐朝の文物に眩惑せられて極端なる支那崇拜に傾かざるにあらずりしと雖も、それすら朝廷と公卿と學者の一部分に過ぎず、國民の脈管に流動せる此氣は、毫も時間と歴史の爲に銷磨せしめられざりし也、後世元寇を邀撃したる國民、半島及び大陸を震撼したる海賊的倭寇、秀吉の外征、征清の役、征露の役、皆神功皇后が紀元八百六十年冬十月新羅の城門に立てたる誓いと精神的關係をなす、予は敢て皇后の征韓と海賊的倭寇との間に顯著なる系統を見出だしたりと云ふの猪勇を有せずと雖も、兩者の間に横たはれる一縷の脈絡を抹殺するの果斷も亦敢てし得ず

海國的意氣の銷沈期

松浦佐用姫……海人部……長府始めて癒えたる者……越智半島……將門及び純女の人物

神功皇后の外征は、三韓を我に歸服せしめて久しく我が屬國となせるの功を奏せしと雖も、要するに淺き歸服にして深き歸服にあらず、威服にして心服にあらず、彼が傲慢無禮を懲らすと彼が誇耀する所の文明を奪ひ來るとに急にして、根本的に彼を日本化せしむるの長計に於ては、何等の研究する所も無かりき、任那に置きたる日本府の如きも、漸々其實効を失ひて徒らに形式的のものとなりたり、半島人の狡猾は再び盛に用ひられ、我が軍政部は、征討軍の發送と其歸還の爲に忙殺せらるゝに至りぬ、而して、複雑せる諸種の問題は皆歳貢を中心として起りし也、船八十隻の貢物は彼國の財政に非

常の驚慌を與へしに相違無し、半島人の長く我れに恭順なる能はざりしは、一面算盤上の必要に餘儀無くせられたるもののみ。

應仁天皇の五年即ち紀元九百三十五年に於て、諸國に海人部を置きて水軍の基礎を造り、海神の裔阿曇の連祖大濱宿禰をして海人の宰たらしめ、有事の日に於ける水師提督の地位を與へしと共に、最も造船の技に長じたる伊豆の住民に課して十丈の大船を作らしめ、其空前の巨大と遮る物無き快速力とを賞嘆して、枯野てふ絶好の詩的名稱を與へしより、幾多の艦艦は之に倣うて盛んに製出せられしが、終には、大船の祖たる枯野が長年月の功勞の結果老朽用に堪へざるに至りて、之を毀ちて薪となし、五百籠の鹽を焼き、遍く諸國に賜ひて船の紀念となし、船材の火に焼けざる部分を灰燼より發掘して琴に作り、天皇自ら其清韻を愛して『枯野を鹽に焼きしがあまり琴に作り掻き彈くや山良の門の門中の海石に觸立つなづの木のみ

津の國武庫は今の津の兵庫

松浦佐用姫と日本地理の候

さや〜』と詠じ給へり、又、新羅の貢使來りて津の國武庫に宿すや、偶々館亭火を失して港内の碇泊船を大半焼き盡したるより、其謝罪として新羅國の良船匠は夥しく我に送られ、文明の造船術を以て着々我が艦船を改良するに至りたり、斯の如く母后が功勳の結果、應仁の朝に於ける航海事業の發達は頗る見るべきものありて、海上の健見は一種の詩的感情に教へられ、波濤の生活を樂むの趣味を學びしに拘はらず、是より後二百五十六年、宣化天皇の朝に至りては、一の伊奘册尊無く、一の神功皇后無く、有髯男子を背後に隨若たらしめし神夏磯媛、速津媛、諸縣君泉媛、阿蘇津媛、菟夫羅媛、田油津媛等の女豪傑を景行、仲哀、神功の時代に輩出せしめたる筑紫の地、空しく一の松浦佐用姫を出だして、良人大伴狹手彦が半島の遠征に赴くを悲み、船を望み袂を振つて、凝立遂に石に化せしてふ小説的俗譚を留めたるは何ぞや、之に依つて測り得たる所に依れば、

齊明天皇の時代阿部比羅夫が蝦夷を征し船楫を攻め遠く黒龍江を廻りて

我國が半島の版圖を失ひたるは、船八十隻の貢物問題に關する新羅の反抗を表面の理由とするの外、別に、日本の地理と氣候が住民を麻酔して愛土病に罹らしめ、美人の人を惱殺するが如く離れ去ること能はざるに至らしめたるの深き理由を見出ださるべからず、斯くて任那の日本府は廢滅に歸し、宣化の子欽明をして慷慨任那の興復を遺詔となして崩ずるの恨みを吞ましめ、遠征軍屢々發したるも徒らに姑息の成功を面目として、軍を還すの口實を作るに急に、遂には狡猾なる新羅が大陸に於ける唐朝の興隆を機會として、彼の勢力を利用し高麗百濟を亡ぼすの計を講ずるに遭ひ、一千三百年代の女皇齊明をして、第二の神功皇后を以て自ら任じ、舟師を進むるの壯舉に出でしめたりと雖も、不幸にして筑紫の行宮に崩じ、皇太子中大兄代つて軍務を統監するに至り、大に兵を進めて高麗百濟を救援したるが、唐の海軍と戦つて全く空前絶後の大敗北を取り、我國

大陸の北部に我が武を輝かせしは、勿論快心の舉たるに相違無しと雖も、願勢を挽回する事に於ては何等の刺戟ともならざりき

の歴史に拭ふべからざるの汚辱を點じたり、史家天智の中興と稱して、中大兄が皇帝としての事業を讃し、其制度文物の整頓を云ふと雖も、開關以來眼中に他の強大なる者を認めざりし日本が、始めて大陸の新興國唐朝を自己より強大なる者開明なる者となし、少なからざる損害と輕侮とを彼より受け乍ら、猶ほ且つ辭を卑うし禮を厚うして交りを求め、彼の制度文物を摸擬し得て自ら足れりとしたるに憾み無き能はず、進取邁往の氣象全く失はれて、又三韓回復を夢るの好兒無く、空しく太宰府を中心として筑紫の沿岸に消極的防備を施し、大陸の遠征軍今や到ると、風聲鶴唳に膽を破り易く、男も女も皆松浦佐用姫の亞流とはなり畢んぬ、嗚呼太宰府とは何ぞや、是れ半島に於ける我が勢力の縮小せる結果、任那の日本府亦何等の威令を行ひ得ず、已むなく退嬰的方針を取り、宣化の朝九州博多に此府を開きて、殺を貯へ兵を置くに至りたるものにあらずや、即ち

太宰の開府は軍政の進歩を示すものにあらずして、日本の歴史に滴りたる一汚點なるのみ、天智の朝に至りて太宰府の存在を益々顯著ならしめざるを得ざりしは、確に汚點を墨く塗り直したるもの也、汚點の色上げをなしたるもの也、さゞなみや滋賀の都の文明、青丹よし奈良の都の文明、能く大陸の精華を移植して特殊の發達をなさしめ、畫の如き天地に畫の如き社會を開き得たりと雖も、人心の萎靡、風俗の腐敗は其極に達し、剛健なる祖先の面影は、白金の目貫の太刀を下げはきて練り行く子に認むること能はず、海を見れば目を舞はすが如き宮びやかなる國民となりぬ、不思議にも實に、日本に於ける海賊の歴史は、此奈良朝の聖武天皇が美的時代を以て最初の隆盛期となす、而して記憶せよ、是等の海賊は應神天皇の時代諸國に置かれし海人部の健兒の子孫なることを、奈良朝に於ては、是等の海賊は瀬戸内海及び其附近に出沒して、官物若しくは富豪の財

貨を掠むる者に過ぎざりしと雖も、年代は漸次に之を膨脹せしめ、後世遂に、瀬戸内海を根據として大陸及び半島に遠征的侵掠を試むるの大倭寇となすに及べる也、蓋し、伊弉諾伊弉册以來の海國民的負けじ魂は、全然時代の風潮の爲に漂はし去らるゝに及ばずして、何れの部分にか祖先の遺血を保存し來り、却つて柔弱淫靡なる奈良朝の風潮に激勵されて時代に反抗するの波動となりしかど、數代の間辭屈して發せざりし此氣は、恰も長病始めて癒えたる者が足定まらずして未だ遠行に適せざるが如く、先づ總に盆池上の瀬戸内海を世界として、豪傑の一端を漏らすに至りたる也、詩人紀貫之が堂々たる國司の身を以て、海賊の憂に落人の如く見すばらしき旅行をなさざるを得ざりしは、名著土佐日記の證する所にあらずや、既にし紀元一千五百年代に入り、日本人の最墮落期たる藤原氏弄權時代となり、清和天皇の貞觀十一年五月廿二日新羅の海賊船二隻博多に

來りて、豊前の朝貢品たる絹綿を奪ひ去りたるを始めとし、半島人の侵寇頻りに至り、延喜二十一年六月醍醐天皇をして「敵國降伏」の四字を書して筑前箱崎の宮に納めしむるの大驚慌を來し、終には後一條天皇の寛仁三年四月十七日契丹の部屬たる刀伊の來寇となり、朝野震駭策の出づる所を知らず、纔に太宰の帥藤原隆家の力に依り之を撃退するに至りて、日本人の意氣銷沈や極まれり、茲に於て祖先の海國民的遺血を傳へたる瀬戸内海の海賊は痛く憤慨せり、祖先が彼に加へし所の方法を以て反對に彼より加へらるゝに至りたるを見るや、歴史を有せる彼等の血液は俄に沸騰せり、瀬戸内海の盆池上を世界とするの秋にあらざるを悟れり、即ち進んで遠征的海賊となれり、盆池上の世界は忽ち擴張して際涯無き大海原となれり、斯の如くして外寇の刺戟は倭寇の勃發を誘導せり、後世北條時代に於ける元寇が痛烈なる大倭寇を刺戟し出だせるに對して、頗る意味あ

る照應をなすにあらずや

伊豫の越智半島が海賊の大巢窟となり、後世倭寇の總司令部を有するに至りたる事は、記憶せざるべからざる重要な地理的及び歴史的题目也、蓋し越智半島の地たる、伊豫の中央より斗出して瀬戸内海の腹部を衝き、三島、野島、因島（いのしま）を吐きて安藝備後と相呼ぶ、東望しては穩波浪速に連りて席の如く、西指すれば馬關海峡近く海門をなして直ちに朝鮮半島に通じ、而して南向するときは、古の早吸名門たる豊豫海峡を過ぎて、日向、大隅、薩摩に至ること極めて容易也、瀬戸内海を中心として其周圍及び朝鮮支那に活動を試みんとする者の根據地たるべく、是れ以上の好位置はあるべからず、自然は海賊の爲に其適當の根據地を指示したる也、斯くて海賊の膨脹發達は、一千五百九十年代朱雀天皇の朝に至りて驚くべく顯著なるものとなり、海路之が爲に壅塞し、山陽、南海、西海の調貢は悉く

彼等が分捕品となりて朝廷に達せず、遂には伊豫椽藤原純友が海賊化するありて、政府の一大敵國を水上に湧出しぬ、東方の大陸賊將門と西方の大海賊純友と相呼應して、軟弱なる中間の藤原政府を恐喝せしは、兎に角困眼を一洗すべき奇觀にして、歴史の單調を破りたる一異彩ならずとせず、將門純友共に大膽にして細心ならず、近眼にして遠視力を缺き、暴戾にして英雄の資格を有せずと雖も、要するに照らず降らざる花曇りの如き醇陶しき天氣に堪へずして、霹靂一聲天地を撼破するの爽快を食りたるものに過ぎず、其罪の半ばは時代に負擔せしむべきのみ、亦快男兒たるを失はざる也、而して皮相の見よりすれば將門を主として純友を従とすべしと雖も、歴史に與へたる結果に至りては純友反つて將門よりも大也、將門が東陸に偏在して小成に安んじ、帝王の生活に擬し、酒色の樂みに耽りて馬鹿を盡しつゝある間に、純友は豊豫海峡の要衝日振島に據りて充

分に基礎を固め、四國を略し九州を制し、一千五百隻の戰艦を運用すること臂の指を使ふが如く、向ふ所披靡せざるなかりき、加之一面京師を脅かし、密かに兵を遣はして毎夜坊肆に火を放たしめ、政府をして其變幻出沒の端睨すべからざるに惶惑せしめたるが如き、其手段甚だ低しとなさず、而も終に失敗を取るに至りしは、彼が暴戾にして人を用ふることを知らざるの過ちなるのみ、戦ひの罪にはあらざる也、若し彼れの部將藤原恒利が政府軍に降りて日振島の内面を説明せざりしならば、彼が事に慣れたる一千五百隻の戰艦は、地の利に依りて政府軍の二百隻を囊中の物となすべく、司令長官小野好古も源氏の元祖たる副官六孫王經基も、純友の指頭に弄せらるべき運命に陥らざりしを保し難し、予は純友の暴戾を憎むが爲に史上の事跡を蔽ふこと能はず、純友の如きは萬能足りて一心足らざる者と云ふべきか、然れども乞ふ聞け、純友が重要なる史上の人物た

る所以は、純友自身の爲しし事を總括したるの價值にあらずして、彼が爲しし事の偶然の結果が歴史に大影響を及ぼせるに在り、开は何ぞ、曰く、純友の亡滅は國內に於ける海賊の氣勢を殺ぎ及び其便宜を奪ひて、彼等を驅つて海外に雄圖を披くの已むを得ざるに至らしめたり、海賊を化して倭寇となしたる大動機は純友の亡滅也

倭寇が再び祖先の状態を繰返すに至りたるや、他より來りて之と抱合したる一作用あり、即ち平安朝の中頃より大陸及び半島の邊民が盛に我に來りて貿易をなすに至りたるものは是れ也、此作用は内に壓せられて暫く活動の舞臺を失ひし海賊を誘導して、火と爆發物と相呼應するが如くに一致し、終に我より進んで、一面は貿易一面は海賊と云ふ全然抵觸せる兩種の目的を一の動作に結合したる遠征となりたり、支那の書に、『日本人は性狡猾にして、産物と武器とを兩つながら携へ來り、沿海の地方に出沒し、乗ずべき隙あれば武器を

出だして侵掠を縱まゝにし、隙なければ産物を陳べて貿易をなす』と記せるは、是れより遙に後の事に屬すと雖も、彼の貿易隊に誘導せられたるの倭寇は、最初より斯る趣味を帯びつゝありし也、而して倭寇が發展の経過は、先づ我と歴史的關係の密接なる半島よりして、次に大陸に及ぼしたり、高麗の元宗順孝王四年我が龜山天皇の弘長三年即ち紀元一千九百二十三年北條時宗執權の四月に、彼の使來りて海賊を禁ぜられんとを乞ひたるを見れば、倭寇の處置法は此時に至りて重要な彼の國家的問題となりたるを知るべし、是れ往昔任那日本府時代に於ける所謂倭寇と異なりて、區々たる私人の海賊的侵掠に過ぎざるに、彼の國家を動搖せしむること斯の如く甚だしきは、我が波濤の健兒が年代と伴ふて秩序ある發達をなし來りたるを證するもの也、知る、源平兩氏が一榮一落の如きも、是等の健兒の眼中には蝸牛角上の紛争よりも輕微なるものとして映ぜしなる

べきを、畢竟するに、海國的意氣の銷沈期に於て、倭寇を形成すべき凡ての要素が、涵養せられ、蓄積せられ、而して凝結し、而して發動し、幾たびか刺戟を受けて膨脹發達したるものにして、遂に弘安年間の元寇に非常なる刺戟を與へられて、花飛び火進るの大爆裂を來し、半島の全部及び大陸の沿海地方數千里を横行して、日本男兒が人間以上の高潮に昇りたる夜叉の如き活動を開演するの機會に接しぬ

蒙古の來寇に報復す

コロムバスも亦日本に至らんとて出でし者……
河野通有……河野通有流と日清戦争及び日露戦争の關係……倭寇の根本的意義

弘安の元寇は全然海賊的也、元の都に滞留すること二十餘年間、元主忽必烈の帷幄に參して、日本侵掠の謀議に與りし、以太利ヅエニスの大旅行家マルコポーロが、其故郷に歸りてゼノアの戦に虜となるや、囚中驚くべく荒唐なる大旅行記を作りて、歐洲人の魂を奪ひ膽を破りたる事は、今猶ほ世に残れる其書に依つて吾人の當時を想像し得る所なるが、書中 *Nipangue* の名に於て我が日本を紹介したる一條は、如何に元の君臣が我國を世界の寶庫として垂涎せしかの内情を窺ふに足るべきもの也、曰く、「ジバング」は東洋の一孤島にし

て大陸を距る一千五百里、其面積頗る廣し、住民皆容貌端麗にして風俗醇雅、宗旨は偶像崇拜教にして政體は君主獨裁、毫も他國の干渉を受けず、此島黄金の無盡藏にして年々の産額驚くべく多大也と雖も、君主嚴に戒めて其輸出を許さざれば、商舶の來り訪ふもの極めて稀に、外國と貿易を爲すこと甚だ振はず、同國に至りし者の言に據れば、皇居の美觀は形容に超絶し、屋上黄金の板を敷いて瓦となし、室内の天井は皆貴金屬を以て張り、客室には純金より成れる多くの小卓を置き、窓も戸も柱も樅も皆金を鑲め、燦然として目を奪ふの狀、吾人の決して想像し得ざる所なるが如し、島中又眞珠多く、其色淡紅にして其形渾圓、量積亦甚だ大に、其價白色眞珠の比にあらず、人を葬るの禮は一般に火葬を例とすと雖も、或は土葬を營むもありて、土葬を營む者は死屍の口に一個の眞珠を含ましむることを惜まず、此島又種々の寶石を産出す、人民悉く尙武の氣象に

富みて、勇敢なること世界に比無く、當時亞細亞の西部を併呑して餘威歐洲に及びし忽必烈の大軍すら、一撃にして粉碎せられたりと、何ぞ其誇大なるや、此旅行記一たび出て、歐洲の冒險家を刺戟すること甚だしく、一時ジバング熱の流行を來して、好奇心と慾望とを乗せたる探検船が、幾たびか地中海のほとりより絶東に送られしと云ふにあらずや、西大陸の發見者コロンパスも亦、ジバングに達せんとして探検船を發し、偶然にして西大陸に到着せし者と云ふにあらずや、而もマルコポーロをして、黄金の無盡藏としての日本を、其旅行記に描かしむるに至りたるものは、元の君臣先づ斯く信じて、其垂涎の情を彼に看取せられしが爲めなるのみ、忽必烈を始め欲心滿々たる眼を開いて東天を望み、喉より手の出づる思ひにて黄金島ジバングに向ひし當時の實相は、此誇大なる旅行記の裏面に活躍しつゝある也、要するに、元は我に向つて海賊的侵掠を行

はんと試みしものいみ、對馬、壹岐に加へたる其亡狀は、懸て日本全島に加ふべき彼が海賊的動作の發端にてありし也、而も、日本人の勇敢能く彼が驕慢の鋒を挫きて、驚風怒濤の之と相呼應するあり、元の全軍を覆没せしめて殆んど餘類無からしむるに至りたるより、消極的には此神聖なる美島を醜虜の蹂躪より免れしめ、積極的には日本人の意氣を壯にし其抱負を大にして、益々大陸人を輕視せしめ、物々たる彈力自ら抑制すること能はず、更に大陸に向ふ日本人の海賊的動作に大勢焰を加へて、彼が國家的海賊に酬うるに我が民族的海賊を以てせしめたり、此に至りて回顧する時は、元寇の本質たる竟に辭屈せる海國民の活氣を勃發せしむるの導火線に過ぎざりし也、海賊來つて海賊の眠を呼び覺ましたるものに過ぎざりし也。

進んで、我が海賊が元寇の刺戟に興奮したる状態を事實に據つて説明せんに、伊豫國の住人河野通有なる者、二隻の輕舸を發して山

の如き艦艦の並列せる敵中に潛ぎ寄せ、檣を倒して敵艦に攀ぢ登り、數百人を殺傷して艦長と覺しき者を捕虜となし、一兵を損ぜずして還りしてふ史上の事實は、諸君及び我等の記憶して忘るゝ能はざる所なるが、南北朝の時代伊豫の越智半島を根據地として、全日本の海賊を臂の指を使ふが如くに制御したる海賊大王は、實に此神勇鬼膽なる通有の子孫にてある也、人或は神風の靈驗を説くこと甚だしきに失すと雖も、元寇を撃退したるは單に神風の力にあらず、日本男兒豈神風を俟たざれば事を爲す能はざる無能者ならんや、日本人が歴史的自尊の念と天才的狂熱との抱合する所、忽ち人間以上の高潮に上りて、各自に鬼神を凌ぐの怪勇を生じ、能く十數萬の元寇を辟易せしめて、大艦巨煩亦何の爲す無く、彼等毛唐人をして案に相違の退軍をなすの已む無きに至らしめたるを見よ、日本人の怪勇は前半にして、伊勢の神風は其後半のみ、神風は怪勇の跡を掃除したる

ものゝみ、嗚呼此神秘的趣味を帯べるの大捷は、如何に日本人の意氣を揚らしめしぞ、天上天下唯我獨尊とは、印度の釋迦と此時の日本人の抱負也、而も、扁舟を飛ばして十數萬の敵中に入ること無人の空海を行くが如く、人を殺し將を擒にすること藝を採つて物を取るよりも易かりし河野氏の徒が、一段國民中に卓出したる絶大抱負を生じて、大陸人を見ること豚犬の如く、餘勇勃々自ら抑ふる能はざりしの状態を想像し來れば、今尙ほ眼前に彼等の英姿の活躍するを覺ゆる也、人間の興奮既に此絶頂を超ゆれば、所謂圓石を千仞の壑に轉ばすが如く、如何なる事情も如何なる障害も之を防遏し得るものにあらず、必ず達すべき所に達せずしては止むべからざる也、故に國家若し此機運に乗じて外征の師を起さば、彼等河野の徒は踴躍して其先鋒たらん、國家若し此機運を利用せずんば、彼等は單獨にして私的外征軍を起さん、北條政府が元寇の防衛及び元寇再來の虞

れに對する設備の爲めに財政を紊亂し、其破綻の彌縫に忙殺困殺せられて他を顧るの餘裕無きに當り、河野氏の子孫が其一門及び同趣味の健兒を糾合して、日本海賊の中心となり、盛んに大陸及び半島に遠征軍を送りて、人を殺し財を掠むる元寇の行動に報復し、他の筆法を以て他に加ふるに及びたるを見よ、而して、通有が小舟を以て大艦を襲ひし勇敢輕捷の成功は、後の海賊に對する絶大の精神教育となり、能く輕舟を飛ばして大陸半島の沿岸及び河江に出没し、小を以て大を挫き、敏を以て遲に克ち、輕を以て重を破り、賊を以て鯨を苦むること、總て通有の奇襲より發展したるものにあらざるはなく、竟に傲慢なる大陸人をして「倭を禦ぐの船は須らく高大なるべし、高大なれば則ち彼を衝壓す、彼の舟小、我に當る能はざる也」と負惜みの法螺を吹くに至らしめたるを見よ、先づ元寇と我が海賊即ち彼の所謂倭寇との間に横はれる報復的關係を明かにせずし

ては、或は我が國民の性格を誤解するの過失あらん、史家此に留意せざるべからざる也、予を目して漫に奇言を弄して自ら喜ぶの者となすこと勿れ、實に、日清戰役及び日露戰役に於て、水雷艇の實地活用法を世界萬國に教へたる者は、河野通有の奇襲及び通有の方式に則れる海賊の奇襲を祖先の歴史となす所の、島國日本人なるにあらずや、予は此に於て、讀者と固く約束して海賊の根本的意義を定めざるべからざるの必要を生ぜり、予は何ぞや、曰く、元寇以後に於ける日本の海賊即ち大陸及び半島人の所謂倭寇は、劫掠を第一の目的となす賊性の發動にあらずして、殺人放火を第一の目的となす痛烈なる復讐心の發動なること也、極度なる彈反性の發動なること也、是れ彈反性に富み復讐心に富める日本人が、在來の海賊的形式に依りて發動せるもののみ、劫掠は勝利の結果の分捕をなすもののみ、今日より見て非文明なるが故を以て之を罪惡となすは苛酷也、

後世海賊を組織するの分子甚だ複雑となりて、枝葉の意義を生ずること多きに至りたりと雖も、此根本的意義は儼として尙ほ今日に存せり、此根本的意義を知らずしては、是より後に記述し論評する所の海賊の行動を解釋すべからざるのみならず、併せて予が日本海賊史を著はしたるの意を疑ふに至らん

例令ば、南北朝の中世以降、豪族相争ふの結果其首腦を失ひ土地財産に離るゝに至りたる者が、六七十人團結して何の系統にも屬せざる孤獨の海賊隊を組織し、既にして大陸の岸に到るや、船を焼いて再び還らざるを誓ひ、數千里を横行して萬餘の生靈を殺傷し、一人を失ひ二人を失ひて殘餘機に五人七人となるも猶ほ沮まず、遂に一人も殘らず死したるに至つて始めて休せしが如き、是れ一種の悲觀より自棄的勇氣を喚び起して、どうせ頼み少なき世の中に、面白からぬ月日を送らんよりは、人を殺し血を流して極度の亂暴狼籍を

働き、之に依つて平生の鬱憤を散じ、而して後快く笑つて死に就かんと、單純なる狂的發作にして、自己の能力を信じ大陸人の爲す無きを侮る日本人の抱負が、時代に迫られて此逆行的手段に依るの餘儀無きに至りたるものゝみ、若し劫掠を第一の目的とするを海賊の本義とせば、毫も此等の者の意中を解釋すること能はざる也、後世群雄割據時代の諸侯が、軍資の缺乏を補ふべく盛んに海賊を利用するに至りて、海賊の所業は純盜賊的に傾向したりと雖も、是れさへ自己は唯盜賊の技手にして、人に雇はるゝ一種の職業たるに止まり、賊性ある盜賊にてはあらざりき

英雄的海賊大王の傳

我邦英雄の一人の殆んど史上に選ばれんとする者……南朝の忠臣北島家と海賊との關係……北島師房の遺れ大將軍報り……恐るべき眞其親王……明帝刺殺の計畫

地理と歴史が、伊豫の越智半島及び其附近の島嶼を海賊の根據地に供したる事に就いては、既に前々章に於て詳述せり、而して、元寇に對して奇襲を試みし勇士河野通有の子孫が、此半島及び諸島嶼に據りて全國の海賊を手足の如くに働かしむるに至りたる事も亦、諸君の了知せらるゝ所となりたるを信ず

河野の一族頗る繁榮して、河野の十八家と稱せらるゝに及び、波濤の健兒其門に充滿し、異域の珍寶其室に重積し、人は皆海外を語

是より具體的記事に入る

り大陸を説き、眼中王侯無く、世界を見ること家の如し、それ等の牛耳を把れる河野本家の主人は、宛然たる無冠の帝王なりし也、十八家の一に村上氏あり、古來海賊の首領として雄を一方に稱せし者なるが、鎌倉時代の中頃、其家の主人常陸介頼冬なる者に子無きを以て、河野本家の主人通晴が孫小太郎道吉を養子となし、此者長じて村上左衛門太夫後に日向と稱し、名を頼冬と改む、此に於て有力なる村上は河野の一族となりて十八家の一に加はり、河野の勢焰益々揚れり、數代の後、村上三郎左衛門義弘なる者子無くして其家絶えんとし、他の十七家が争ふて其見孫を脩め、相續の權利を博取せんとするの動搖を生ずるに至りたり、其時上國に一個の人傑あり、遙に河野一家の動搖を望見して嫣然たる微笑を含めり、其意未だ測るべからず、即ち是れ北島山城守師房にして、我邦英雄の一人の殆んど史上に湮滅せんとする者也

英雄北島
師房

英雄亦或程度迄は時代に支配せらるゝ者也と雖も、時代は竟に英雄を抑壓して庸人と別無き者に化すること能はず、必ずや微小の罅隙を破つて逸出せらるゝを如何ともし難き也、師房は南朝の忠臣にして神皇正統記の著者たる北島親房の孫、中納言鎮守府將軍北島顯家の子也、顯家南朝興復の業成らずして攝津の安倍野に戦死するや、師房身を脱して深く信州の山中に隠れ、以て再舉を計る、嗚呼此非凡の青年が勃々たる覇氣と一世を空ふするの大識見とを胸底に藏して、猿悲み水激するの深山に臥し、徐に時勢を察して我身の過去と將來とを思ひ測りし時の感慨は如何、雲裡に坐し巖頭に立つの人は、出世間の仙子ならず、却つて是れ渾身に火の如き大俗情を燃やすの肉塊のみ、彼の聰明は彼をして到底南朝興復の不可能なるを悟らしめ、三更燈下四山の風雨に和して、血涙の衣を沾すを覺えざりしが、翻然一笑眉を伸して起ち、眼を小島内の得失興廢より縦ちて世

界の大局面に注がんと、絶望の底より希望を喚び來り、悲觀の極より樂觀を開き來りて、飄然山中を出て、孤筇單笠紀州の雜賀に赴きたり、蓋し師房の意たる、紀伊の海賊を利用して雄圖の門途をなさんとするにあり、實に是れ、祖父親房が故智を襲ひて而も一層之を擴大せんことを試むるもの也、蓋し、南北朝時代に當りては、海賊は歴史を或程度迄に支配するの動力となり、足利尊氏が九州より再舉して正成を殺し義貞を破りしも、巧みに瀬戸内海の小島を利用して得たるの成功に外ならずして、其他此時代に海賊を利用しての豪傑少なからずと雖も、竟に師房の祖父親房の如く海賊の利用に慣熟したる者あるを見ず、勿論北朝の勢力天下を風靡して、海賊の外利用すべき者を慮さざりしにも由るべけれど、一面よりして、海賊の俠氣に富みたりしと、親房が海賊の心腹に價すべき熱誠至忠の君子たりしを見るべからずや、親房初め水路に依りて陸奥の根據地と中原

との連絡を計るべく、紀伊伊勢の海賊を糾合して水軍を組織し、其既に成るや、後醍醐天皇の皇太子義良親王を奉じて艦隊を率ゐ、關東の官軍の應援に赴きしが、途上颶風に遭ひて艦隊四散し、事空しく志と違ふに至り、纔に常陸の關城に據つて一髮の危きを保ち得たり、然れども、親房及び其部下の海賊軍は、一敗を以て挫折するが如き薄志弱行の徒にあらず、其再び關城より芳野に歸り來るや、大に熊野の海賊を鼓舞し、瀬戸内海の小島と氣脈を通じて、勤王の義旗に波濤を蔽はしむるに至りぬ、既にして、義良親王即位して後村上天皇となるや、南朝に屬せるの海賊は一段の勢焰を加へて、北は筑前の沿岸より南は日薩隅の邊地を掠め、征西將軍懷良親王を中心となせる九州の南朝方を援けて、大に北朝を惱ますに至れる、要するに是れ親房の遺功なるのみ、遂に北朝をして、海賊を以て海賊を制するの窮策を行はしめ、伊豆の造船業及び航海業者の子孫にして

海賊となれる安宅氏の一族を紀州の由良に住ましめ、以て南朝の海賊を防禦せしむるの已むを得ざるに至らしめたり、兩帝堂々の争ひに始まりて海賊の鬪ひに終る、此に至れば天下の事亦眞の英雄を勞するを須ひざる也、乃ち師房は祖父の故智を襲ひ、其舊交を温め、其天稟の識見と膽略、人を魅するの風貌言動、總て英雄の資格たるべき利器を適宜に用ひて、忽ち紀州の海賊をして身を容るゝに地無きの浮浪子を自己の首領と仰ぐに至らしめたり、然れども、師房は是等の海賊に向ひて、酸苦にして成功の望み無き南朝興復を語りし者にあらず、別に、彼等をして骨鳴り肉躍るの情に堪へざらしむるの雄圖を説き、區々たる小島内の得失興廢を念頭より一擲して、活劇の舞臺を大陸に求むるの愉快を思はしめたる也、快男兒些か語るに足る

則ち、伊豫の海賊河野が一族たる村上義弘死して、十八家皆其相

續を争ふの動搖を聞き、機以て乗ずべしとなし、揚言して曰く、「我輩も元村上氏也、往いて其跡を繼がん」と、海賊の精銳三百餘人を選抜し、大船を聯ねて紀州を發す、先づ讃州鹽飽島を襲うて其海賊首領鹽飽三郎光盛を降し、備中神島に至り、島人を糾合して五百人となり、師房自ら緋威の鎧を着し、金の鍬形の兜を戴き、虎の皮の尻鞆掛けたる太刀を佩き、日の丸の軍扇をサツと披きて士卒を指揮する其大將軍振りの氣高く凛々しさ、面清く骨秀で、皎として玉樹の風前に臨むが如き美貌に、眉を上げて叱咤すれば萬夫不當の勇士も懼れて頭を掻ぐることも能はざるの威嚴を包み、堂々として伊豫の大島に向ふ、恰も孤鶴の鷄群に擁せらるゝ如く、麒麟の群獸に臨むに似たり、此に於て、村上義弘の幕下たりし海賊等皆風を望んで來り降り、師房を義弘の舊城に請じて之に臣事す、英名忽ち十八家を蔽ひ、人心悉く歸す、師房乃ち從容として河野の本家に親和を求め、

舊の如く十八家の一となり、而も其實權實力に於ては、却つて本家を以て自己の配下たるの觀を呈するに至らしめ、一面頻りに河野系以外の海賊を征服して、遂に海内の海賊を統一し、日本海賊唯一の主權者即ち海賊大王となりぬ、大陸及び半島を侵掠するの遠征隊は、皆此總司令部の畫策指揮に基いて進退することとなりぬ、師房死して其子山城守義顯繼ぎ、義顯死して其子山城守雅房繼ぎ、共に父祖の業を承けて、海賊大王たり、英雄たり、一指を動かして大陸半島を震動せしむるの巨人たり、小島内の得失興廢を見て一笑にも價せずとなす所の快男兒たり、讀者は日本が案外にも歴史の表面に輝かざるの人物に貧しからざりしを記憶せざるべからず、而して、我が海賊的遠征軍の勢力範圍は、支那朝鮮より安南、暹羅、呂宗、馬刺加、印度に及び、半は侵略的に半は通商的に、日本人の提出したる問題にして至る處解決を與へられざるは無く、八幡大菩薩の軍旗の

バハン船
即ち八幡
船也軍神
八幡の名
を記した
る旗を掲
ぐるに由
る

飄る所、帝王をして都を遷さんことを思はしめ、將軍をして城を棄て、奔竄せしめ、元明人が呼び做せしバハン船の一語、好く彼地の兒啼を止むるに至りぬ、亦壯ならずや、亦快ならずや
征西將軍懷良親王後醍醐天皇の皇子も亦海賊と關係淺からざりし逆境の英雄也、後村上天皇の正平二十三年、時恰も元朝を亡ぼして新興の勢威隆々たる大明が、却つて我が海賊の數千人を如何ともすること能はずして、太宰府を鎮護せる征西將軍の威名に依頼し、書を親王に致して倭寇の制壓を乞ひ來りぬ、親王其書辭の不遜なるを見て之を叱斥す、此時に當りてや、元の遺臣にして慷慨の烈士たる方國珍、張士誠の徒亡命して我に來り、我が海賊と合一して明朝の害をなさんことを謀り、爲めに海賊の勢焰を加ふること多大にして、明主再び懷良親王に書を致し、其効無きを見て更に將軍義滿に書を送り、遂には三たび親王と義滿とに書を與へて、大舉將に日本を征

恐るべき
國王親王

討せんとすとの恫喝を試むるに至りぬ、然れども親王は昂然として
 毫も彼に屈せず、彼を嘲るに元寇の轍を蹈む者を以てし、大陸の君
 臣をして凜乎心膽を寒からしめ、又た兵を我に加ふるの斷無からし
 めたり、適々明の丞相胡惟庸反を謀り、日本人の剽悍に依頼して事
 を成さんとし、密に親王に意を通じて其助力を乞ふ、懷良親王は眞
 に恐るべき人なる哉、暗に巨龍を屠りて大陸の形勢を一變せしめ、
 機に乗じて平生の鬱屈を四百餘州の山河に伸べんことを企てたり、
 即ち僧如瑤に死士四百を與へ、絶大の蠟燭を作りて之を貢品に充て、
 中に刀劔と火薬とを封入して赴かしめ、白日彼の廷に於て其天子を
 刺すの鬼策を行はしむ、不幸にして未だ手を下さざるに事露はれた
 りと雖も、明人之が爲めに膽落ち氣沮み、全く我に加ふるの野心を
 抛棄したり
 南北朝の極めてダラシなき争鬪の續きたる時代に於て、歴史の表

面に輝かざるの英雄が天地を驚かしむるの壯舉を試みたりし事は、
 日本人に對するの大なる教訓ならずとせず

倭寇素の濃密なる時

朝鮮に於ける空前絶後の英雄……朝鮮は、疾く、我が屬國たりし筈……十五六の美少年にして、曠男神の如き者……倭寇素の濃密なりしが缺點……

朝鮮半島に於て、我が海賊即ち彼の所謂倭寇が最も活動を縦まゝにしたるは、南北朝の鬭争漸く困難となりし頃より南北合一に至る迄の半百年にして、勿論海賊大王英雄北島師房が海内の海賊を統一せしより以後の事也、忽ち來り忽ち去り、忽ち密集し忽ち散開し、出没變幻極まり無くして、半島の國家と民人をして應接に遑あざらしめし倭寇の事蹟を、一々明細に記述し得ざるにあらず、然れども、是れ徒らに枝葉を繁くして根幹を蔽ふもの也、相似たる多くの事件を列舉して讀者を單調に苦ましむるもの也、故に予は、半島の

歴史に重大の影響を及ぼしたる出来事を擧げて、之に關係したる彼の人物を發見し、成るべく簡明直截なる論評を試みて、讀者の頭腦を不經濟に費さしむるの弊を除かんとす、嗚呼歴史は飽迄も人物の歴史也、予は半島に出征せし我が海賊の中より、特に傑出したる人物を見出だすの材料を有せずと雖も、我が海賊の爲めに輝やかされし彼の英雄に接し得たるを喜ぶ、今の韓國王室の始祖たる李成柱即ち是れ也

朝鮮に於て、日本人の能力を充分に發揮したる時代の海賊は、純粹にして毫も雜質を混浴せざりし倭寇にして、上將より下卒に至る迄打てば響く大和男兒を以て全軍を組織し、恰も精金の塊の如き價値あり、規模の小なるに憾み無き能はざりしと雖も、其鋒銛の銳利なることは鐵城石壁と雖も徹せざる所無かりし也、高麗王辛禑の三年即ち我が南朝の終末後龜山天皇の天授三年に當り、空前の大倭寇

半島を侵掠し、過ぐる處人煙を絶して曠野とならしむるの猖獗を逞うし、官民軍士皆先を争ふて山林に遁竄し、五月遂に國都に迫りて、高麗王をして手足措く所を失はしめ、若皇都を遷して倭人の難を避けんとするに至らしめたり、是れ半島人の懦弱にして高麗政府の鞏固ならざりしにも由るべけれど、些々たる數千の私兵を以て一國の基礎を動搖せしめたる、如何に我等の祖先の雄烈なりしかを見るべからずや、此時若し出征軍中に非凡の人傑あらば、直ちに高麗に代つて新國家を建設し、數百年前に於て半島は既に我が屬領となり、今日露鷲の跳梁を見ること斯の如くなるに及ばざらしめしならんに、恨殺す、祖先も我等も共に漫性の愛土病者なることを、一たび死を決して外に向ひし者も、若し還るべき機會と歸るべき理由さへ發見すれば、跡は野となれ山となれ構はずに歸り來る也、高麗の都城事實に於て既に我が手に落ち、王を廢して政令を改むれば則ち足るも

のを、彼等は城下に於て行ひ得たる劫掠を以て既に十二分也となし、人毎に貨物を荷ひ、往く時の軍士は返る時の人足となりて、夢寐にも忘るゝこと能はざる日本の樂土に凱旋し、高麗政府をして遷都の議を中止せしむるに至りたる也、咄海賊、汝等は盜賊以上の事業を成す能はざるか

見よ、見よ、倭寇の成就し得たる事業は、他人の爲めに饜膳を具ふるものに過ぎざりき、倭寇が高麗政府を動搖せしめて、都を遷すの議を起さしむるに至りたるの事實は、偶々半島の野心家に對して高麗の鼎の輕重を問ふの機會を與へ、遂には取つて之に代らしめぬ、是れ豈我が海賊が間接に高麗を亡ぼしたるものにあらずや、野心家とは誰ぞ、恐らくは半島に於ける空前絶後の英雄たる李成桂其人也、成桂僞儻にして大志あり、腹には治世安民の遠謀を貯へ、臂には猛虎を押しにするの勇力を具ふ、最も騎射に巧にして漢代の將軍李廣

半島空前の英雄
李成桂

の神妙を稱せらる、倭寇猖獗にして全半島能く之に當る者無きを聞き、慨然義旗を擧げて孤軍國難を攘はんと起ち、先づ倭軍と智果山に戦ふ、一倭人あり、陣を出づること二百歩、臂を叩いて成桂を嘲罵す、成桂即ち長箭を勁弓に加へ、射て之を斃し、勢ひに乗じて掩殺、遂に前例無きの大捷を奏して、威名忽ち全半島に振ひ、我が海賊も亦始めて半島に一個悔るべからざるの人傑あるを知りたり、此に於て成桂の存在は俄に高麗政府の存在よりも著しくなり、民皆此人に依つて安きを求めんとし、救世主の來降を迎ふるが如き崇拜の眼を以て之に對するに至りぬ、是れ成桂の人物の偉大なるにも由るべけれど、區々たる我が邊海の私兵に戦ひ勝ちしてふ一事が、直ちに國王を顔色なからしむるに至りたりとは、餘りの憫れさに過ぎて却つて滑稽の感を催さずや

之より三年を経て、高麗辛禑の三年我朝後龜山の天授六年、全羅

道の引月驛に於て、李成桂再び倭寇を破れり、此時倭軍に少年の將軍あり、年齒十五六にして色は雪の如く容は花の如く、彩袍輕甲、蘆花馬に跨り綠沈槍を揮ひて、往來さながら疾風閃電の如く、驍勇絶倫向ふ所披靡せざるは無し、高麗兵怖れて阿只拔都と呼び、風を望んで之を避く、成桂獨り神力を抖擻して之に當り、射て其鐵肥を穿ち、部下の勇士をして其首を斬らしむ、斯の如くして、成桂の威望は益々重量を加へ來れり、而して後成桂は單に自己の弓箭將軍たるに止まらずして、他に大なる價值を有せるを示すべき機會を迎へ得たり、辛酉の十一年我が後龜山の元中元年九月、倭寇大舉百五十艘の船艦を聯ねて咸鏡道に至り、元帥沈德符と戦つて大に之を破る、半島人皆曰く、李將軍にあらずんば能く之を退くること能はずと、成桂乃ち其部下の精銳に女眞の兵を加へ、進んで咸州に陣し、兵を兎兒洞の左右に伏せて倭軍を誘ひ、計に陥れて大に之を破る、是れ

李成桂の傳記の中倭寇と直接の關係無き部分は之を省略せり

成桂が勇武に兼ねるに智謀を以てするの良將たるを證するものにあらずや、而して、此戰に於て成桂に用ひられし女眞の兵が、勝に乗じて殺戮の快に耽らんとせしを、成程嚴に戒めて酷虐を縱にするを得ざらしめ、悉く敗殘の倭兵を虜にし、恩威を示して放ち還したり、是れ成桂が天下を歸服せしむるの徳と略とを具足するの帝王的氣象を示すものにあらずや、高麗朝に代つて韓國の基を開き得たるもの偶然なりとせず

李成桂の外、慷慨自ら請ふて倭寇の討伐に當り、我が海賊をして『白頭の崔萬戸のみ、纔に敵手とするに足る』と云はしめし、判三司事崔瑩なるものありと雖も、此二人を除いては、全半島殆ど人無かりし也、要するに、李成桂の威望を得たるは高麗の危きを救ひしが爲めにして、高麗の危きに陥りたるは倭寇の強盛なりしが爲め、而も其所謂倭寇なるものは、我が邊海の負けじ魂を有せる浪客を内容

となせる少数の私兵に過ぎずとすれば、何ぞ夫れ我の強くして彼の弱きの甚だしかりしや、李成桂如何に稀世の名將たりとも、我に此健兒を統轄するの主帥ありて、半島の一角に根據地を設け、土着の風雲兒と氣脈を通じ、永久的事業として、寸進寸取、尺進尺取、着々として版圖を擴張し行かば、彼の弓箭、彼の智略、亦用ふるの餘地無からんのみ、半島に於ける倭寇の缺點は餘りに倭寇素の濃密なりしに在り、餘りに固く、餘りに鋭く、餘りに烈しく、餘りに忙はしかりしに在り、一所に凝着せず、一事を把住せず、忽ち來りて忽ち去り、忽ち止まりて忽ち動き、其始めや一大群なりしと雖も、進ひに隨つて別れて數團となり、數十百の部隊となり、號令一途に出でず、進退合期する能はず、故に、彼の國王をして遷都を議せしめ、彼の元帥をして旗を棄て、走らしめ、彼の官民をして相携へて山野に奔竄せしむるの動搖を與へたるにも拘はらず、結局何の事業をも

彼の地盤に印象し得ざりじ也、是れ、日本人が愛土病にも理由するならん、半島の地理風俗に通曉せざりしにも理由するならん、然れども他に大なるの理由あり、倭寇素の餘りに濃密にして、之に容積を加へ重量を加ふべく他の分子を融和せしむるの餘地無かりしもの是れ也、彼地の風雲兒を吸収して我が血肉組織に同化すること能はざりしが爲め也、出征軍中此段の消息に通ずるの人傑無く、半島亦我が海賊を利用するの膽略ある者無かりしを惜まざるべからず

半島に於ける我が海賊の活動は、上古より豊臣秀吉が海賊禁止令を出だすの時に連りたりと雖も、其最も激烈なりしは、南北朝の頃より兩朝合一に至るの半百年にして、人物に於ては今の韓國王室の始祖李成桂を中心となせること、既に論述せし所の如し、而して大陸に加へたる我が海賊の打撃も亦、上古より秀吉の時代に連りて休すること無かりしと雖も、其大明を震撼したる驚天動地の大活動

に至りては、後柏原天皇の大永年間より正親町天皇の永祿年間に連る群雄割據時代の三十餘年間に於て、倭寇に多量の雜質を混じ、之に依つて其容積を加へたと共に、其活動の狀態も頗も雄大となり、乞ふ次章を見よ

やんごとなき姫君は鬚を髷けて宮垣の破れ目より豆腐買ひに走り、高位の御座中襷掛けにて、御苑の池の水に赤ん坊のオシメを洗ふ(拙著人情觀的日本史の一節)

倭寇素の稀薄なる時

倭寇素の稀薄なるに至つて始めて大事を成し得んとす……千古の奇傑王直……將軍が家臣と商業上の華容を争ふ……一百十有餘人……樞要なる肥前平戸島……日本一萬あらば明朝を轉覆し得べし……銀月の蝕中亦倭寇素の餘滴を含有するにあらずやと疑ふ……蜘蛛陣と榴花軍……

彗星的勇士……唯一人の倭寇……策士初宗彦

我が海賊が支那大陸に大飛躍を試むるに至りたるは、異分子を混濁すること頗る多くして、倭寇素の甚だ稀薄となりたる時代にあり、之に就いては、明の嘉靖二十年即ち我が後奈良天皇の天文十一年、大陸を亡命し來つて肥前の平戸島に據り、自ら徽王と號し明朝の一

王直一に
汪直とし
て傳へら
る

寧波は明
政府が我
使者を嬰
應して貨

敵國を以て任じたる、海賊の大資本主、大問屋、大本部、日本海賊と支那海賊との大調和者たりし、千古の奇傑王直を中心として、盛に時代と倭寇との關係を説述せざるべからず

明より黄金の勘合印を與へられて彼と貿易するの特權を得つゝありし周防の大内氏は、我が後柏原天皇の大永三年即ち明の世宗の嘉靖二年に、僧の宗説なる者を使者とし、勘合符を持して彼地に至り貿易をなさしむ、此時に當りて、勘合印を用ふるの特權を有しつゝある者は、大内氏の外足利將軍即ち公方家あり、公方の管領細川高國あり、九州の大友家あり、將軍と其家臣と配下の諸侯とが、商業上の敵手として、極力華客取りの競争をなしたるは、實に今古再び見るべからざるの奇觀なりし也、既にして宗説の寧波に至るや、同時に、公方の貿易使宋素卿、管領高國の貿易使僧瑞佐の兩者來りて之と衝突し、素卿は明人にして彼の事情に通曉せるより、瑞佐と共に

物の檢閱
を行ふ處

惡入道宗
説

配憶せよ
機に一
十餘人の
み

に賄賂を用ひて官吏を籠絡し、宗説に後れ來りて却つて宗説に先んじ、饗應と檢閱とを受く、此に於て宗説たる者指を啣はへて引込むべきにあらず、僧也と雖も佛に禮し經を誦するの僧にあらざるの彼は、忽ち惡入道の本色を現はし、赫然激怒、圓顔恰も烈火の塊の如く、直ちに從者一百十有餘人を率ゐて公方及び管領の貿易使を襲撃す、瑞佐忽ち其坊主頭を失ひ、素卿纔に身を以て逃る、然れども宗説は之を以て饗れりとなさず、素卿が大陸の地理に明かに事情に通ぜるを誇りとして、此處迄御出て甘酒進上の内地に逃げ行くを面憎しとなし、追躡して數百里の間に焚掠を逞ふし、人を殺すこと無數、紹興の府城を抜き、兵馬指揮官を擒にし、船を奪ひ貨物を滿載し、臂を叩いて大笑して而して還る、僅々一百十有餘人の倭賊をして、數百里間の常備兵總計一百万ばかりの群中を横行すること無人の曠野の如くならしめしとて、彼地の文士は痛く憤慨せり、看來れ

ば堂々たる大諸侯の使者亦一種の海賊にあらずや、之に依つて如何に日本人の豪勇なりしか、如何に日本人の大陸人を輕蔑して土偶視せしかを覗ふべきのみならず、海賊趣味の感化が何者をも麻す所無くして、島國より大陸に至るの海上に煙霧の如く充滿し、一たび船を出だして外に向ふ者は、大諸侯の使者と雖も亦此感化を免るゝ能はざりしの情態を見るに足るべし

而も、予が宗説の暴動を叙したるは他の大なる理由よりして也、明政府一たび宗説の暴動に膽を破られてより、左無きだに我が海賊の憂を如何ともすること能はざる折柄、愈々日本人の恐ろしさ身に沁み込み、遂には一切日本人を拒絶するの方針を取りて、勘合符の約束を取消し、貿易を嚴禁するに至れり、此に於て今日迄の彼地に於ける貿易業者即ち日本品の大問屋は、俄に業を失ひて海賊的趣味を帶べる密貿易者に變じ、落第書生、不平家、俠客、破獄者等四方

より嘯集して之に加はり、而して、我が海賊貿易兩ながら行ふ所の健兒は、彼等と氣脈を通じ、彼等に誘導せられて、合同一致の行動をなし、寧波は一の梁山泊となれり、否、梁山泊を數倍したる豪傑の淵藪となれり、是れより後の倭寇は、名は倭寇と雖も其實純然たる倭寇の分子は甚だ稀薄にして、大陸産の海賊十に我が海賊一を加味したるが如き割合となり、我が海賊は全體に向つて味を與ふる鱈節の如く貴重なるものとなれり、されど是れ我が海賊の實數の減少を意味するものにあらず、我が海賊の實數は寧ろ年代を逐ふて増加するの傾向也と雖も、大陸産の海賊は遙に是れよりも多數にして、自然に斯の如き結果となりたる也、此に至つて、始めて天下の事を談ずべし、始めて英雄の業を成すべし、倭寇の絶大なる活動をなし得るに至りたるは、倭寇素の稀薄となれるが爲め也

水滸傳的豪傑にして破獄をなしたる李光頭、許棟の二人は、梁山

泊の巨魁にして、其部下の頭領に王直、徐惟學、葉宗滿、謝和、方廷助等の傑物あり、就中王直は事實に於けるの大首領にして、其器度の宏大なること測るべからず、彼は徽州歙縣の産にして、人となり任侠を好み權略に富み、抱負最も偉大、自ら無冠の帝王を以て任ず、天下の英傑及び惡少豪猾の徒、皆其名を聞いて來り従ふ、徐惟學、葉宗滿等皆其門客也、始め日本に對するの貿易業を營み、及び安南、暹羅、呂宋、馬拉加等と盛んに交通貿易をなし、數百艘の大船を動かして數億の巨資を運轉す、食客雲の如く、小旋風柴進の小なるを嘲けり、宗説の暴舉一たび明政府をして外國貿易を嚴禁するの退縮的態度に出でしめしより、自ら率先して密貿易者となりしが、支那の姦商等國禁の嚴なるを奇貨として、大問屋たる王直より盛に外國品を買ひ入れつゝ、相約して其代金を拂はざるに、王直は日本人其他の荷主に賣められて板挟みの苦境に陥り、今は是迄也と、

門客一千餘人を率ゐて逃れて海中に入り、海島に據つて一小王國を建設し、同郷の豪傑許棟を推して魁首となす、此時に當りてや、元朝亡びて未だ幾ばくもなく、支那の常例として亂に乗じて王號を僭するの猾徒多く、元の亡命者にして再舉策成らざる慷慨悲憤の客は四百餘州に散在せり、是等の或者は大事を協るの英雄に遭はざるを悲みて佯狂の酒徒となり、風月三味の詩僧となり、亡國の哀歌を發して自ら慰めつゝありと雖も、其竟に自ら慰むる能はざる者に至りては、大半來つて王直の小王國に投ぜり、此に於て王直の事業は海島に溢れ、其動靜は明政府の熱心を以て注目する所となり、必要は内外より王直に迫りて、安固と利便とを兼ね備へたる新なる根據地を見出すべく試ましめぬ、我が肥前の平戸島を選び得たる王直の炯眼恐るべき哉

平戸は我が海史上最も樞要なる地點にして、此葦爾たる一小島の

我邦柔術の起原

明治年間平戸より出てたる人物は、皆大に其の興味を起す

歴史を編するも、優に一巻の書籍を成すに足るべきもの也、往昔我朝の遣唐使は此地より發船し、南部支那より我に渡來する者も必ず皆平戸を指すを例となせり、葡萄牙人も來つて此地に貿易せり、西班牙人、和蘭人、英吉利人、苟も我に來つて貿易を求めし者は、必ず先づ平戸を以て其互市場となせり、弘安の役に元將范文虎が率ゐし南部支那の兵も此地を指し來れり、我邦の特技たる柔術も、文祿年間平戸の人秋山四郎兵衛なる者が支那の法を傳へ來りて、之に自家の工夫發明を加へ、天神眞揚流三百三法として世に行ふに至りたるもの也、明人と邦人との雜種兒たる國姓爺鄭成功も平戸に生れたる者にして、島上に其紀念碑を殘せり、而も斯の如く多くの重要な歴史に富めりと雖も、千古の奇傑王直が之に據つて王と稱し、支那人をも日本人をも西洋人も混然其廣淵なる胸懷の中に融和せしめし時の如く、平戸島が光彩を放ちたるの歴史は無き也、躍つて

退治年間に於ては、大に其の興味を起す

天文十一年王直鹿兒島に赴きて貿易をなす

ゆべき平戸海峡を隔て、後に九州を負ひ、前は席の如き海洋を控へて、物の遮る無く楊子江口一帯の地を指す、無數の大島小嶼は恰も衛兵の如く其周圍に横はれり、退いて守るも日本の局面に影響を及ぼすこと無くして、進んで大陸を圖らんにも、是以上の好位置あるなし、王直の時代に處し王直の境遇に在りて王直の事業を成さんとする者に對して、平戸は實に天與の好根據地也、而して、後土御門天皇の文明年間より後柏原天皇の永正年間に連り、周防の大内家が海賊を利用して朝鮮を劫掠し、却つて其掠奪品を支那人に轉賣する方法を取るや、平戸を以て其貿易場に充てしに由り、平戸は海賊的貨物の集散場として、王直以前より既に海賊的趣味を帯びつゝありし也、王直の來つて之に據りたること偶然にあらずと云ふべし、王直一たび來りて王と稱せしより、平戸の繁昌は寧ろ當時の博多、浪華を凌ぎ、九州の沿岸を廻航して貿易を試み、或は日本に來れる

天文十八年
年補御牙
人平戸に
移住す

王直の
野心の
大

倭寇軍略
に曰く嘉
靖三十二
年五月二

倭寇素の稀薄なる時

西洋人を誘引して此島に移り住ましめ、一面に於て平戸は日本に文
明を吸収する口唇たるの觀を呈するに至れり、王直が平戸政府の組
織は、王汝賢及び自己の義子毛海峰を文官とし、徐惟學、葉宗滿の
輩を武官とし、主として我が海賊を誘導して大陸を侵寇することを
謀り、終には明朝を覆して己れ取つて代らんとするの大野心を起し、
深く日本人の強健勇武なるに信頼して、日本人一萬あれば大明を征
服すること易々たるのみと云ひ、而も此聲言を事實に現はすべく、
天文二十二年即ち明の嘉靖三十二年五月、空前の大倭寇を起すに至
り、海賊大王たる伊豫の村上家は王直の協議を受けて、全國の海賊
に命令を下し、悉く來つて事に與らしむるに及びぬ、王直用ふる所
の船艦巨大にして山の如く、聯舫一百二十歩、一艦二千人を容るべ
く、木を以て城櫓の四門を造り、馬を馳せて艦上を往來すべし、此
大艦數十隻に加ふるに我が海賊が慣用せる河野通有流の輕舸幾百を

十三日倭
船三十七
隻龍王船
に泊す天
を蔽ふの
山の如く
其帆亦空
に浮ぶの
雲の如し

倭寇素の稀薄なる時

以てし、大陸人の所謂バハン旗を飄して進む、王直が所有せるの大
艦は、王直以外何者も之と拮抗すべき物を有せず、明政府の水軍す
ら、之に劣れる船艦を運用するに過ぎざりき、是れ王直の地位と便
宜とに造られたるものにして、明政府以上の大艦を所有するの王直
は、直ちに明政府以上の海權掌握者たりし也、吾人逸史を拾ひ野史
を集めて此一段に至れば、渾身の血液俄に沸騰して、我が體中亦倭
寇素の餘滴を含有するにあらざるかを疑ふ、王直は眞に絶世の奇傑
なる哉、日本人一萬を用ひて四百餘州の國土四億萬の民衆を攫取せ
んとするの霸王的膽略、鬼神を驚かしむるに足る、而して、一萬人
を以て大明を取るの能力ある者と王直に信ぜられし我が國民の名譽
は大なる哉

然れども天文二十二年に始まりたる大倭寇は、王直の希望せしが
如く一萬の數に日本人を充たしむること能はざりき、此時に於ては、

海内の海賊多くは群雄相食むの爪牙に供せられて、公然海賊衆てふ名義の下に水軍の用を勤め、海賊大王村上氏の権力も亦之を統一し得ざるに至りたるを以て、王直の大招集も豫期の半数に及ばず、純粹の日本人は倭寇に味を附くるの鯁節に過ぎざりしかば、大侵略の効果案外に小にして、號令一に出でず、各部隊任意の行動をなし、竟に大事を成すに至らずして已みしは、千歳の痛恨事ならずとせず、否、是れ必ずしも未だ痛恨事とするに足らずして、王直は最初の一擧の不成功に沮喪するが如き小膽狭量の孺子にあらざるを自證すべく、其後數回大計畫をなせしと雖も、事業未だ成るに及ばずして眞の痛恨事は湧き來りぬ、然れども开は後の條に譲りて、先づ支那大陸に於ける我が海賊の活動を見ん、是れも、種々の史書より材料を拾集して繁雜に記述するの徒勞を避け、其中最も精采ある部分を摘録して、讀者に全豹を推知するの一斑を供すべし、此に於て予は蝴

蝶陣と榴花軍とを擧げざるべからず、是れ實に海賊史中の詩篇にして、殺人放火の赤黒く血腥き頁に挟まれたる美麗なる紅白の紙也、天文二十二年の晩春、支那大陸は正に書けるが如き好風光を呈せる時、王直に送られたる倭寇の一部隊百人許りは、主力と離れて任意の行動をなし、錢塘江畔の數百里を横行せり、中に一個の將軍あり、明人之を呼んで大王と云ふ、頭には例の鍬形の兜を戴きて、身に猩々緋の陣羽織を着流し、太く逞ましき馬に跨り、白き扇を颯と披いて士卒を指揮すれば、百兵悉く扇影の閃きに随つて動き、これを望むに、一隻の蝴蝶翻々として劍花亂れ散るの間に舞ふが如し、明人一たび此風流なる白扇の閃きを見れば、色を失うて遠く遁逃す、竟に此一軍を名づけて、蝴蝶陣と呼ぶに至れり、而して、蝴蝶陣の進んで錢塘江畔の鼈子門に至るや、頗る興味ある小説的寧ろ演劇的なる事件は生じたり、此時把總指揮陳善道なる將軍、一百の蝴蝶陣を、

防ぐべく、數十倍の大兵を率ゐて籠子門外に向ひたるが、其英雄を
 氣取ること甚だ大にして、發するに臨み家人が食膳を供せしを、「イ
 ヤ、賊魁の首を提げ歸つて、それを肴に一献な催さん、女共酒の烟
 を致し置け」など、云ひて、關羽が酒の冷めぬ中に華雄の首を斬り
 してふ三國志の本文を其儘借用し、青龍の偃月刀を小臨に抱へ込み、
 片手には餘り長からぬ髯を大事さうに握り、得々として出て行きた
 る迄は好かりしかど、進むこと未だ幾ばくも無くして蝴蝶陣の伏兵
 に陥り、グーとも云はず殺されてけり、實に笑止千萬の事と云ふべ
 し、されど芝居は此一幕に終らず、此次の幕こそ最も觀るべき價値
 あれ、此大英雄陳善道將軍の勇に參戎萬鹿園と云ふ慈善を看板にす
 る金滿家あり、大英雄先生の失敗も、要するに「エライ聲を持つた」
 と勇殿の御威に與り其信任を厚からしめんと山の氣より、餘りに氣
 取り過ぎたるの過ちなるが、茲に又陳將軍の滑稽なる失敗を機會と

して、勇の金滿家を食ひ物にせんと工らみたる、煮ても焼いても食
 へぬ坊主あり、此坊主住所姓名不明の怪しき奴なれど、唐代の大詩
 人杜甫の故郷として有名なる少陵に生れたりと稱し、身長七尺腰の
 太さ十圍、圓頂黒衣の打扮にして肉を啖ひ酒を飲み、鐵禪杖長さ八
 九尺重さ三四十斤あるに大古錢を環として嵌め、花和尚魯智深が狗
 の肉に蒜味噌を塗りて啖ふの意氣あり、全然水滸傳型の惡僧也、此
 和尚飄然として來つて萬鹿園を訪ひ、「貧道願くは蝴蝶陣を破つて、
 毘殿の讎を報い參らせん」と申込み、充分馳走に與りたる上、附近
 の破落戸溢れ者を催して八十人の生命知らずを集め、蝴蝶陣の白き
 に對して榴花軍の赤きを組織し、折柄眞盛りなる柘榴の花を折りて、
 人毎に頭簪させ、和尚は頭圓くして花の挿しどころ無きが故に、
 力量に任せて、日本の縁日商人が用ふる如き大傘の隙間無く柘榴の
 花にて飾りたるを隻手に擎げ、隻手は好みの鐵禪杖を握つて大地を

節面白く突き鳴らし、妙な身振りにて踊り乍ら、傘に附けたる無数の柘榴の花を紅むの雪と振り散らし、蝴蝶陣を指して進み行ける有様、奇観とも異観とも云はん方無し、坊主也、件の打扮也、さしも蝴蝶陣の勇士等も、呆氣に取られて油断をなし居る所を、和尙仕済ましたりと、益々踊りの身振りに滑稽趣味を加へて、一步々々近づき來り、懸て、白扇、紅袍の大王との距離一間餘りとなるや、急に柘榴の花傘を地に擲つて鐵禪杖を揮ひ起し、唯一打に大王が金の角を生やしたる頭を碎きて、「陳將軍の爲めに讎を報い得たり」と叫びさま八十人を磨き、機に乗じて掩殺せしかば、流石の日本人も不意を襲はれて備へを立て直す隙間無く、前にも後にも例しの無き大敗走に及びぬ、其膽、其勇、其略、敵乍ら適れなる坊主と云ふべし、此に於て蝴蝶陣の殘兵等は、大將無くして漫りに戦ふも無益也と思ひけん、翌日錢塘江上に船を奪ひ、附近の財物を掠めて回り去

りたり、是れ我海賊が單に自己の勇を恃みて餘りに大陸人を輕侮し過ぎたるの失策也、勇を恃み敵を侮るの餘り、各部隊任意の行動に出で、長上の制御を受けず、單獨にして重地に入り、遂には斯の如き不結果に終る者あるも、これを侵略軍の幹部に報告するの便宜を失ひ、單獨にして本國に還り來る也、甚だしきに至りては、一人を以て數十人を殺傷し、刀折れ氣竭くるも敵中を脱すること能はずして、一部隊全滅の不幸を見るも、幹部は毫も之を知らざるあり、王直の雄圖宏謀も此數千の彗星的勇士を如何ともすること能はざりし也、是れ日本人の長所にして而も缺點也、後年豊臣秀吉が外征軍の全功を奏せざりしも此缺點に由れり、而して、伊豫の海賊大王村上師房と云ひ、平戸の徵王王直と云ひ、後の豊臣秀吉と云ひ、若し自ら進んで出征軍を指揮せば、必ず大成功を期し得べかりしならんに、事の之に及ばざりしものは何ぞや、斯の如き彗星的人物を一連鎖に

繋ぎ得るは唯自己の威望の重量のみにして、自己一たび去らば、萬千の彗星悉く天外に飛び去り、大陸の征服未だ功を成さざるに、先づ根據地の土崩瓦解を見んとを慮れたれば也、遺憾ならずや諸君！

一部隊全滅するに至る迄殺掠を休せざる者ありたる事は、既に『蒙古の來寇に報復す』の章中に於て述べし所なるが、今之を事實に據つて具體的に記述せんに、王直が大倭寇を送りたるの翌々年即ち我が後奈良天皇の弘治元年、明の嘉靖三十四年、數十百の部隊に分れて各自其意の赴く所に隨ひ殺掠を逞うしつゝありし我が侵略軍の中、六七十人を以て組織せられたる數部隊あり、期せずして恰も申し合せたるが如き一致の態度に出で、其中には一旦日本に回つて再び來りたるもあらん、或は一昨年以來思ひの儘に大陸を暴れ廻はりし末彼國の船舶を奪ひて濱海に出没しつゝありたる者もあらん、詩人杜甫と同郷の惡僧に其大將を欺き殺されし蝴蝶陣の殘兵もあらんなれ

ど、上陸地は必ず江蘇浙江に限りて、其上陸するや必ず船を焚きて再び歸らざるの覺悟を示し、就中最も猛烈なりし者は、八十餘日の間内地數百里を横行して、五六千人を殺し萬餘人を傷け、始め六七人たりしものが、漸次に一人を失ひ二人を失ひて十餘人となるも意氣益々壯に、三人五人となるも猶ほ城廓を陥れ官衙を奪ふに足り最後の一人となりてより更に一倍の勇猛を加へて、虎の市に出てたるが如く恐慌を與へし揚句、飄然として行術知れずとなりたるあり事此に至れば、果して是れ日本人の狂勇鬼の如くなるが爲めか、支那人の懦弱豚の如くなるが爲めか、其判別に苦まざるを得ざる也、此六十人の爲めに堂々たる明政府の征討軍幾たびか撃破せられ、數萬の大軍を動かして辛うじし之を亡ぼし得たるを以て、揚々として大捷の上奏に及び、明主より特に叙感の詔を賜ふが如き至極の滑稽を演ずるに至りたり、而して此弘治元年は、毛利元就が奇兵を用ひ

て陶晴賢を嚴島に破りたるの歳にして、元就亦所謂海賊方の水軍を利用して巧みなりし者也、國內に於ては、日本人の武力の最も發達して最も多く人物の輩出したる戰國時代の序幕初めて開かれ、海外に於ては斯の如き人間業以上の狂勇を逞うす、此時日本一の英雄豊臣秀吉正に青年二十歳、其信長に仕ふるの前恰も三年

既に國家の大兵を動かして些々たる六七十人の外寇を亡ぼし、四億の民に君臨するの皇帝をして特に其偉功を賞せしむるの明國也、終には倭寇の猖獗を防ぐの策に窮して、其禁遏を我に乞ひ來れるぞ惘れなる、而も此時に於ては足利將軍の威令毫も行はれずして、空しく虚位に坐するに過ぎざれば、明主の依頼に應ずべき權力者を他に見出ださざるべからずして、使者は已むを得ず周防の大内義興に向ひ其旨を傳へたるに、大内氏は却つて之を好機として大陸との貿易を復舊せんことを謀り、豊後の大友義鎮亦需に倭寇禁止を乞ふべ

く渡來せし明使蔣洲なる者を抑留しつゝありしが、大内氏が明使を利用しての策を講ぜしことを聞きて、時こそ來れりと之に先んじ、僧德陽なる者を蔣洲と同行せしめ、海賊の禁遏を承諾したる代りには、再び貿易を許して勘合印を與へよと彼に迫りたり、然れども奇策の上に更に奇策あり、大友氏の奇策は却つて明の總督胡宗憲の奇策に利用せられぬ、胡宗憲頗る謀略に富み、倭寇の近來著るしく膨脹したるは、其國の密貿易者と合體せしが故なるを知り、密貿易者にして賊に化したる者の首魁王直が其張本なるを聞き、倭寇の憂を除かんには先づ王直を亡ぼして禍の根を絶つに如かずとなし、陽つて貿易を復舊するの勅許を乞ひ、便宜事に従ふべしとの明主の委任を受けて、先づ之を中外に公表し、然る後王直の母と妻子の寧波附近に隠れ居れるを索め出だし、王直を招くの書を作らしめ、總督の公文と併せて蔣洲に委ね、大友氏に向つて貿易を許すと共に、平戸

の王直を慰撫して招き還らしむ、母國の平和の爲め也、日本の利益の爲め也、背て其素志を枉ぐるにあらざると雖も、王直たる者先づ一たび還らざるべからず、此に於て王直は其股肱の士と共に大船に乗じて平戸を發し、大友氏亦別に一大船を醸し、僧善妙以下四十餘人を使者とし、貨物を滿載して寧波に到る、是れ我が弘治三年、明の嘉靖三十六年九月上旬也

斯くて、王直の船と大友氏の貿易船とは、舟山島の岑港に碇泊して先づ明の動靜を覗ふ、測らざりき、胡宗憲は大に兵備を寧波に施して之を待たんとは、王直即ち義子毛海峰を遣はして之を詰問せしむ、老獺胡宗憲何ぞ速に蓋襪を出さん、心を指し矢を折つて他意無きを誓ひ、辛うじて王直等の疑ひを解き得たるが、胡の副將盧鏜なる者が私かに善妙に依頼して王直を擒にせんことを謀りたるを、此語外に漏れて王直の耳に入り、再び大葛藤を生ぜんとしたれば、胡

宗憲はこゝぞ大事の瀬戸際と、殆んど己れが兵馬總督たるの權威をも打棄て、身を謙り百方慰撫に力め、遂に此大魚を網にし得るに至りぬ、則ち大友氏の使者善妙は其貿易の目的を達して回り、王直は一時故郷に留まりて閑に將來の計策を考慮しつつある中、宗憲の毒手は竊かに其背後に迫り、翌永祿元年、明の嘉靖三十七年正月二十七日、遂に欺き捕へられて按察使の獄に投ぜられんは、前に云ひし眞の痛恨事とは是れ也

義子毛海峯獨り身を脱して、手兵と共に逃れて舟山島に上り、岑港に據り、王直の爲めに讎を報ぜんと言言す、豪俠の徒、不逞の客、争うて來り付き、平戸に在るの我が海賊亦至る、胡宗憲兵を遣はして來り攻め、却つて大に破られて全軍の半數以上を失ふ、再び來り攻めて再び破られ、三度四度して宗憲竟に此一小島を如何ともすること能はず、却つて島上の人の結合力を強めて、純粹日本人の海賊

と支那より日本化したる海賊との精神的調和を成就し、日本人亦故國に歸ることを思ふの遺傳病を起さずして、俱に共に舟山島を第二の平戸島となし、永久的占領の覺悟を定め、其年の夏より土地の開墾に着手したり、此に於て、舟山全島苟くも耕地となすべき處は、寸土を除さず米麥野菜の場に化せられ、新日本の氣運は藹々とし島上より蒸し出だされたり、明國の大を以てして一小平戸島に加ふる事能はざりしは何ぞや、是れ日本の領土なれば也、然らば則ち、自己の領土たる一小舟山島に加ふること能はざるは如何、之に對するの答辭は無き也、此答辭無きを以て、彼は只管大友氏より赴きたる第二回の貿易使に依頼し、特に巨額の財物を與へて、歸途舟山島に寄航し、退去の説諭を爲さしめんとしたるに、使者は又成るべく明政府の意を迎へて、幸に復舊し得たる貿易の特權を失はざらんとするを以て、舟山島に至りて懇々其永住の不利なるを解き、速に退

去せんことを勸む、然れども、先づ舟山島に新日本の基礎を築きて、漸次に支那大陸を日本化せんとするの大計畫を有せる我が海賊的健兒等に、陳腐平凡なる利害論の容れらるべき筈は無し、使者は忽ち明政府の廻はし者たることを看破されて、舟山島の軍中に抑留せらるゝこと數ヶ月、本國にも歸り得ず、大陸にも跡戻りすること能はず、進退維れ谷まりぬ、此に於て、使者の意既に明政府の依頼の爲にあらずして、自己一身の爲に謀るの已むを得ざるに至り、舟山島退去の同意者を誘引するにあざれば、自己も亦此島を脱し得ざるを知り、全心全力を茲に集注して、先づ舟山島永住論者の比較的軟派に屬する者より説き初めたり、同意者は一人より二人に増加し、十人となり二十人となれり、氣早の連中は、六七十人の一部隊を以て任意の行動をなし、海賊流を此消極の場合にも用ひて、發頭人たる大友氏の使者を跡に残し、勝手に船を舫して散じ去れり、島上は

波濤の如く動搖せり、而して糧食缺乏の大打撃は此妙ならざる場合を選びて來れり、舟山一島の産物を以ては到底此多數人の食料を支ふるに足らずとの聲は、糧餉部の側より起れり、舟山島永住論は之が爲めに根底より打破せられぬ、乃ち同年七月を以て岑港より柯梅に移り、新に船艦を造りて退去の準備をなし、傍ら糧食の缺乏を補ふべく、九月を以て大陸に大侵掠を試み、殆んど酷烈を極めて回たり、去る程に永祿元年も早や肌寒く物哀れなる十一月となり、首腦たる王直は急に取戻すべき策無く、味方の中には最初の盟約を破りて我儘勝手に散じ去る者多く、大友氏の使者亦機會に乗じて頻りに退去を説くより、竟には、一先づ解散して再來の時期を俟つに如かずとの議に決し、思ひくゝに舟山島を引拂ひ、處々より舟を奪ひ來りて貨物を載せ、中には日本を指して歸る者もありしかど、多くは南に向つて去り、其大部分は臺灣澎湖島を新なる根據地となせり、

281960

嗚呼舟山島の根據地一たび失はれて、王直の雄圖は其頭と共に地に落ちぬ、王直が久しく命を絶たれずして獄裡に繋がれつゝありしは、倭寇の復讐的大焚掠を緩うする胡宗憲の計畧のみ、既に倭寇が舟山島の根據地を棄て、四散し去りし以上は、王直の頭は宗憲の前に於て何の價值も無き也、記憶せよ、絶世の奇傑にして其名歴史の表面に顯著ならざる王直は、永祿二年、明の嘉靖三十八年十二月二十五日を以て、省城官巷の口に斬首せられぬ、其獄裡に在ること正に二年、意氣毫も衰へず、神色自若、笑つて頸を延べて刀を受けたりと云ふ、是れ孺子胡宗憲に謀られたるを自ら嘲るものなるべし、王直一たび捕はれて倭寇何の爲す無く、王直一たび死して倭寇復た振はず、徒らに明將俞大猷、戚繼光、劉顯の輩をして討伐の名を成さしめ、遂には竊々たる鼠賊の類に退化しぬ、王直は眞に大人物なる哉、我れ此失敗の英雄の爲に悲むこと深矣

彼の眼に映ずる倭寇

艦・舟・的・軍・艦……日・木・人・の・刀……日・木・人・の・箭……
 善・く・賭・ひ・妄・り・に・死・す・る・色・黒・き・勇・士……日・木・人・と
 支・那・人・と・の・調・和……武・者・修・行・的・服・装・の・倭・寇……
 二・三・人・を・以・て・組・織・し・た・る・の・遊・軍……日・木・人・の・爲
 す・所・皆・神・變・不・可・思・議・に・見・ゆ

神功皇后の征韓以來、大陸及び半島との交通頻繁に赴くに隨ひ、
 我國造船の技術は一たび大に進歩せしが、鎌倉時代に至りて再び衰
 退し、かの元寇襲來の際河野通有が用ひし輕舸の如き、軍用として
 最上の物と認めらるゝに至りぬ、然るに、天授六年足利義滿初めて
 使を明に遣はさんとして、古法を尋ね大船を造るや、茲に造船の技
 術を復舊せしむるの動機となり、應永十三年周防の大内盛見が義滿

彼の眼に映ずる倭寇

の命を奉じて巨船を造りたるを始めとし、泉州堺の商賈、九州の諸侯大商人等、競うて大船巨船を作り、義滿の奨励に應じて盛に海外貿易を行ふに及びたるより、我が海賊も亦得意の河野流輕舸を飛ばすの外、大船を製出して之を運用すべく試み始めき、然れども、未だ造船の方法に幼稚なる點多きを免れず、其技術亦精巧ならずして、大木を縫合するに鐵片を聯ねて大釘を用ひず、藁草を以て罅隙を填め、其勞力甚だ大にして時を費すこと頗る多く、而も其竣功したるを見れば、最も大なるものにして三百人以上を容るゝこと能はず、七八十人を容るゝものを以て普通となす、其形體卑陋にして底邊は扁平、波を破るの用に供し難く、布帆は檣の正中に懸りて唯順風を孕むことを解するのみ、無風或は逆風に逢へば、檣を倒して船を操るの外無かりし也、されば、我が平戸より支那の寧波に至るの一航路に於て、時としては數ヶ月を費すの不便ありき、獨り航行の不便

のみにあらず、我が海賊は斯の如く劣等の軍艦に據るを以て、彼の巨大にして精巧なる軍艦に當ること能はず、大陸の軍略家をして、『倭を禦ぐの船は當に高大なるべし、高大なれば則ち彼を衝壓す、彼の舟小、我に當る能はざる也』と唱へしめたるは之が爲め也、我が海賊をして、彼の艦隊を避けて其意想外の地に上陸せしめ、艦隊の力の及ばざる陸上に於てのみ活動し、而して成るべく其歸る時に彼國の精巧なる船舶を奪ひ、我の粗惡なる盪舟的軍艦を棄て去るの方針を取るに至らしめたるも之が爲め也、更に一步を進めて、福建浙江の奸民を手先に使ひ、複底尖銳の快速船を外國に購ひ來らしめ、其方式に則りて長風破浪の飛龍を造り、九州より福建廣東地方に至るの數ヶ月を僅に數日の航程に短縮せしめたるは、實に海賊の力也、既にして、王直我が平戸に來つて海賊の大本部を設くるや、二千人を容れて、甲板上に馬を驅るべき、山大の巨艦を發して、我が海賊

の勢威を張り、曾ては「彼の船小、我に當る能はざる也」と云ひし大陸人をして、『嘉靖三十二年五月二十三日、倭船三十七隻龍王塘に泊す、天を蔽ふの山の如く、其帆亦空に浮ぶの雲の如し』と驚嘆せしめ、又『三十三年四月五日双桅大船一隻あり、教場に泊し、魚貫して上り、龍王塘に至る、之を數ふるに五百六十二人、螺を吹き、隊を整へ、城外を遶り、旗を揚げて來り攻む』と云ふが如く、我が船艦の雄大なると其乗員の多數なるとに舌を捲かしめたり、然れども又之を一面より見る時は、我が海賊の用ふる船艦を改良發達せしめたる者は、我が海賊それ自身にあらずして大陸人也、外國の快速船を供したる者は南部支那の奸民ならずや、山大の巨艦を供したる者は王直ならずや、是れ勇武を尙ぶ日本人の氣風が、鐵を斷つこと瓜の如き長大なる利刀を産し、鐵と漆と彩絲とを用ひたる壯麗なる堅鎧を産し、鬼の面龍の頭の兜を産したるとは、自ら性質を異にし

て、雄大なる船艦は畢竟他の借り物に過ぎざりき、故に、眞に純粹なる我が水軍と彼の水軍との技能を闘はずに至らば、日本人如何に勇也とも、此時代に於ては未だ本家本元の大陸人に勝つこと能はざるべかりし也、後年豊臣秀吉が征韓の役に及びて、陸上に於ける武力の戦ひは充分我の勝利に歸したりと雖も、水上に於ける技術の戦ひが朝鮮人の李舜臣にだも如かさりしものは何ぞや、是れ我が海賊の衰勢より、雄大の船艦を運用するの技術と日本人との關係を薄からしめ、加ふるに我が海賊が王直一輩の大陸人に利用されつゝ、而も彼を利用せしが如くに、豊臣氏は支那及び朝鮮の海事に通曉せる者を利用せざりしが爲め也、予は後章に於て倭寇と秀吉との關係を詳述せざるべからず

戦士として大陸人の眼に映じたる我が海賊は殆んど人倫に絶せり、彼をして驚歎せしめ動もすれば竟に彼をして讚美せしめんとす、曰

彼の眼に映ずる日本刀

彼の眼に映ずる日本人

土佐人の眼に映ずる日本人

彼の眼に映ずる倭寇

く「刀長さ五尺、双刀を用ふれば丈餘の地に及ぶ、又手を加へて舞ふ、鋒を開けば凡そ一丈八尺、舞動すれば則ち上下四旁悉く白うして其人を見ず」、曰く「倭の竹弓長さ八尺、足を以て其脰を踏み、立ちながら矢を發す、矢は海蘆を以て幹となし、鐵を以て鏃となす、鏃濶さ二寸、燕尾をなす、重さ二三兩、身に近づいて乃ち發す、中らざるものなし、中れば則ち人立ろに倒る」、曰く「衆皆刀を舞して起ち、空に向つて揮霍す、我兵倉皇として首を仰げば、則ち下より斫り來る」、曰く「倭奴刀を揮ふこと神の若し」、曰く「島夷出沒飛隼の如し」と、是れ我が日本人の戰士として人倫以上に彼の眼に入りしものならずや、而して、彼は日本人の餘りに勇武なるを驚異するの餘り、「其國の西南に鬼國あり、利鏃を出だす、而して人闘ひを好む、倭人入寇する多く其人を募る、白番鬼あり、黒番鬼あり、即ち古の崑崙奴なり、面深黒にして、善く闘ひ妄りに死す、倭の勝を取

彼の眼に映ずる倭寇

る大率此を前矛となす』など、荒誕無稽の説明を試みんとせり、恐らくは我が色黒く形恐ろしき勇士を見て、斯る臆測を逞うしたるものならん、明史に特筆して曰く、「寇船至れば輒ち風を望んで逃匿す、而して上又之を統御する者無し、故を以て、賊帆指す所殘破せざるは無し」と

海賊隊の作戦法は亦甚だ巧妙也、其初めて彼に至るや、先づ濱海の地或は近島を占領して根據地を作り、而して後、徐に内地の動靜、防備の如何を探查する者あり、或は、其來るや直ちに海岸防備の薄弱なる地點を選びて上陸し、舟を焚きて覺悟を示し、先づ居民の事に堪ふる者を擒にし、一城砦を抜くや必ず豪富の家を襲ひて、利得を其擒にしたるの民と貧民とに分與し、以て嚮導をなさしめ、即ち進んで隣邑に向ふ、民人之に依つて其恩に懷き、爲めに死力を致さんことを願ふ、加之、彼の豪猾なる邊民及び亡命の徒が、自ら進ん

て我が海賊隊を歓迎するあり、彼等は故らに辛苦して我が服飾旗號を装ひ、倭人と目せられて以て自ら誇りとなす、明政府の大兵一たび至るを見れば、彼等は皆散じ去りて、少數なる純粹の日本人のみに戦ひを任かすの、甚だ頼もしからぬ味方也と雖も、中には眞に日本人と生死を共にしたる氣概ある者も無きにあらず、彼等の或者は丈夫の一諾千金よりも重し底の支那的俠氣を用ひて、終始一貫准日本人たるの地位に甘んぜり、我が海賊は斯の如きワム／＼連の味方と眞誠の味方とを併有して、彼地上陸以後漸次に膨脹を加へ、随つて内容甚だ粗雑となり、明史をして「眞倭は十の三、倭に従ふ者十の七」と云はしむるに至りたり、然りと雖も、此日本人と支那人の合同調和こそ、進んで眞に天下を圖り得べきの端緒にして、奇傑王直が大に利用せんことを試みたるは此合同調和の機運なりし也、而して我が海賊が劫掠をなすや、先づ城を攻むるの勢ひを示して、

城中の兵に退守の態度を取るの已むを得ざらしめ、且つ要所々に遊軍を派して傍ら伏兵の任務に當らしめ、以て一面に於ては彼の牽制をなすと共に、他の一面に於ては我が行動を掩護せしめ、其間に於て神の如く敏速に業を爲し了る也、故に、鍬形龍頭の兜、緋威の鎧、猩々緋の陣羽織なんどの壯嚴美麗なる軍装は、之を馬上の將軍に見るべくして、徒立ちの武者の中重鎧を環し鐵兜を戴く者は、非常の剛力士にあらざれば能はず、其大多數は、木綿の袷に牡丹餅大の定紋附けたるを着込み、緞子、革、或は麻の短袴を穿ち、小手脇當だけを附け、大胸亂を腰に下げ、以て進退踴躍に利便なるを尙び、能く神の如く敏速なるの活動をなし得たる也、若し夫れ、彼の大軍に逢はんか、我は忽ち開いて長蛇の陣を作り、前に百脚の旗即ち纏ひを振り立て、次を以て魚貫し、精銳を前と後とに置きて羸弱を中に包み、別に明人或は明装日本人の間諜を放つて敵の虚實を探り、

虚に乗じて急に鼓噪呐喊、人皆踴躍すること鬼の如く、長刀の白光中に明滅して而して進む、戦ひ利あれば長驅して塵殺の快を貪り、若し利あらざる時は、伏兵をして遠つて敵の背後に出て、其中堅を襲破せしめ、以て夾撃を行ひ、十に七八は此法を以て成功せざる無し、或は彼の大兵に掩撃せられて事の急なるを見るや、海螺を吹いて、一二里の距離に在るの遊軍を呼ばば、遊軍聲に應じて來つて敵の側背を衝き、長刀一揮の下時として二人を倒す、別に又二三人を以て一隊を組織するの遊軍あり、固より武勇自慢の飽迄強き荒武者にて、其刀を舞はして横行し、若しくは大手を廣げて飛箭を攫み、人礫を打つを見れば、數千の軍兵も股栗して進むこと能はずと云へり、萬一我が軍敗れて退却せんか、其奪掠せる金銀玉帛を地に委して彼兵を惑はし、間に乘じて遠く軍を收む、而して若し海濱に於て彼の大軍に逢へば、鋒を避けて遠く海上に逃るゝ也、海上の戦ひに

あゝる組人形
 リの綱を二
 遊し以三
 軍たて

至りては、技術上彼に如かざる所あるを以て、我軍多くは正々堂々の對抗を避け、空船に倭人形を載せたるものを連ねて敵の戦闘力を徒費せしめ、突如側面より河野流の輕舸を飛ばして接戦俄に敵艦に闖入し、盡く艦上の生物を海中に掃き落して凡ひ、是れ皆大陸の史乘に傳へらるゝ所にして、彼の眼に映する我が海賊の真相也

我が海賊の貯水の法に就き、彼の武備志に記したる所を意譯せん、曰く、『倭船の來るや、人毎に水四百斤を帶す、約八百碗毎日六碗を用ふ、之を惜むこと金の如くにして、常に其匱乏を防ぐに意を留む、將に中國に近づかんとし、八山陳錢を過ぐれば、必ず船を停めて水を換ふ、之を換ふるの所以は、冬は寒くして較久しきに堪ふべきも、五六月の温天之を桶中に蓄ふれば、二三日にして即ち壞る、甚だ清冽也と雖も數日を過ぐるゝこと能はざる也、倭奴一の秘法あり、泉を煮ること一二沸にして之を缸缶に置き、能く宿して壞れざらしむ、

而も亦半月に過ぎず、久しき時は則ち能はざる也」と、之に依つて我が海賊の飲用水に苦心せし状態を想像し得べきのみならず、大陸人が我を驚歎し我を畏怖して神の如く鬼の如き者となすの餘り、する事爲す事一々神變不可思議のやうに見え、水を煮立て、瓶の中に封じ置けば久しき間腐敗せざる尋常一様の事をも、『倭奴一の秘法あり』など、稱して、敬服感服すべき能事の一となせしの状態を想像し來れば、啞然大笑せざらんとするも能はざる也

我が海賊と豊臣秀吉

日本の受附口……波の上に浮動する獨立社會浮
 連城……秀吉新たにウツの大木の友人を得たり
 ……秀吉が外征軍の性質……秀吉の外征軍が成
 功せざりし異なる理由……秀吉と王直との關係

王直の頭一たび地に落ちて、我が海賊復た振はず、明朝を覆して大陸の國號を改むるの雄圖空しく夢幻に歸し、竊々たる草賊の部類に退化したりと雖も、猶ほ臺灣澎湖の根據となすに足るあり、南方支那を目的地として、進退の敏速、出沒の自在に大陸人を惱ましつゝありしが、王直刑せられし年に於て既に二十四歳の青年となり、而も信長の草履取として將來の青雲を夢みたりし秀吉は、恰も海賊の衰退と正反對に頭角を擡げ來りて、遂に日本の主權者となり、名

附日本口受

聲赫々として大陸及び半島を照耀するに至れり、此に於て、一百數十年間日本の正當なる主權者を見出だすこと能はずして、倭寇の禁遏を乞ふべき受附口に惑ひつゝありし明政府は、時こそ來れりと之を秀吉に申込めり、秀吉輒ち之を容れ、適ま内海に賊船の警報ありたるを機會として、一喝威令を下す、曰く「(一)諸國於海上賊船之義堅被成御停止之處今度備後伊豫兩國之間伊津喜島にて盜船仕之族在之由被聽食曲事に思食事、(一)國々浦々船頭獵師何れも舟つかひ候も其所之地頭代官をして速相改向後聊以海賊仕まじき由誓紙申附連判をさせ其國主取あつめ可申上事、(一)自今以後給人領主致由斷海賊之輩在之者被加御成敗曲事之在所知行以下末代被召上事、右條々堅可申附若違背之族在之者忽可被處罪科者也、天正十六年七月八日、秀吉朱印」と、文藝の暗黒期たる戰國時代の公文は、奇々怪々解すべくして讀むべからず、如何にも間が抜けて滑稽趣味を帯びたるも

是れより以前に、天正八年に於ても、日本甲斐、島比律、呂宋、最北の河、より入り、んとし、

のなれども、太閤殿下の勢威は此死せる數百の文字を活動せしめて、火の雨の如く頭上に降り、全日本の海賊を一時に閉息せしめて、悉く正業に歸せしめぬ、何ぞ其手段の痛快なるや、何ぞ其權力の大にして勢威の隆なるや、而も竟に正業に歸すること能はざる徹底豪爽の徒は、已むを得ずして遠く日本を去り、二十隻乃至三十隻の船舶を連結して南洋の波上に浮連城なるものを造り、妻子鶏犬と共に此中に住み、八幡の白旗を其上に飄へし、世界に於て何れの國家にも屬せざる移動的獨立社會を組織し、海路の要衝に此浮連城を置くこと數十、通行の船舶を認めれば、忽ち散開して之を包圍し、以て劫掠を縱まゝにするに至れり、加之是等の獨立せる海賊は、豊臣氏の末より徳川氏の初めに連なりて、呂宋、東埔寨、安南、暹羅等に、貿易侵掠兩つながら試み、或は日本街を開いて移住する者を生じ、全然日本との關係を離れて、日本の外に新天地を開き、其船の至る

ツアドル 港に大戦 して遂に 我船の四 班牙軍艦 に衝破せ ちるに、 日本甲斐 の徒は直 に躍つて 敵艦の上 一艦内を 将卒を居 りせしこ とあり

所日本甲斐の名を以て呼ばれ、剛勇敏捷、力を以て争ふべからざる者との公評を受けぬ、我が慶長九年、西暦一千六百四年、英國船タ イガー號に遭ひて、却つて彼の劫掠する所となり、則ち河野流を用ひて彼の大船を逆襲し、船長以下數人を斬殺したりと雖も、衆寡敵せず、且つ彼の銃砲に當ること能はずして、全群此に死し、唯一人海に入りて纜に逃れ去りたるは、是れ我が海賊の部隊が難風に遭ひて船を失ひ、辛うじて支那船を奪ひて浮連城の本部に回らんとするの途上に在りし者也、秀吉及び家康が特に西國の諸侯及び堺大坂其他の大商人に認許して海外貿易を行はしめし、所謂御朱印船なるものも、動もすれば外人の眼に海賊船と同視せらるゝの災を免れず、眞の海賊船も亦是等の御朱印船の前後に出沒して、巧みに御朱印船と關係あるもの、如く裝ひ、徳川家光が鎖國令を發するに至る迄は、南洋の波濤一日も平穩なることを得ざりき

して俗に 九艘船と 呼びしが、 漸次増加 して徳川 家康の元 和二年に 於ては一 百九十八 艘の多き 上にあり

予をして再び秀吉が海賊禁止令を發せし當時に立歸らしめよ、太閤の一喝能く全日本の海賊を屏息せしめ、支那大陸をして始めて倭寇の憂を免れしめ、明主喜んで爲めに郊廟に謝し、群臣の賀を受くるに至りたるにも拘はらず、我に向つて一言の謝辭無きは如何、倭寇の再び至らざるは汝が郊廟の御利益にあらずして我が太閤殿下の御利益也、何の靈驗も無き郊廟に謝して、靈驗あらたかなる太閤殿下に謝せざるは何等の顛倒ぞ、此に於て秀吉は赫然として鬚眉を振ひぬ、其匹夫より起つて海内を掌握し、餘勇物々發するに地無きを救じつゝあるの時に當り、區々たる我が邊海の私兵に蹂躪せられて、堂々たる四億萬の民衆を有せる大國の力之を如何ともすること能はず、泣訴して我に其禁遏を乞ひ來れるを見、彼は新たに其翻弄に價すべき獨活の大木の友人を得たるを興味となし、笑つて彼の乞ひを容れ、輒ち一喝の下に彼が恐れて鬼神となすの海賊を屏息せしめ、

願みて彼が歎服するの色を望まんとせし也、何ぞ測らん、咽喉元過ぎて熱さを忘れたるの彼は、依然として其獨活の大木に誇り、再び舊時の面目に復して、眼中に日本無く秀吉無きの態度を示さんとは、秀吉何ぞ怒らざらん、然れども、秀吉の怒りは自己より以上の者に對する口惜しさの怒りにあらず、己れ猪小才也との冷笑を帯べる怒り也、イデ其儀ならば彼が鬼神の如く恐るゝ倭寇に十倍したる大倭寇を起して、眞に日本人の恐ろしさを骨の髄迄に浸み込ませ、我を侮りし過ちを悔いしめ、且つは我が發するに地無くして持ち腐りにならんとするの雄圖を披き、老後の思ひ出、思ふ存分に大明を斬り取りて、日本の國威を輝やかし、及び國力の發展に伴ふ利益を收めんと、斯くて秀吉の外征軍は起されたるものにして、之に動機を興へしは倭寇也、其先づ朝鮮に向ひしは、彼の正門より進入して番卒を驅逐せんとしたるもののみ、而して秀吉が外征軍其物の性質も、

倭寇を進化せしめて之を正大ならしめたるものに過ぎざる也、豈獨り其性質の倭寇的なるのみならんや、彼は公々然と其水軍を組織するの要素に海賊を採用せり、南北朝時代の海賊大王村上師房と縁故深き伊勢の海賊の末裔たる九鬼嘉隆は、水軍を編成し及び指揮するの重なる將官となり、脇坂安治、加藤嘉明と共に所謂海賊衆を統率せり

然れども、予は竟に是等の海賊衆に向つて大なる憾み無き能はざる也、既に前章に於て論述せしが如く、我が海賊の運用する軍艦たる、大陸の方式に則つて製造したる物にして、更に何等の機軸をも出ださず、彼と我とを比較するに模範品と模造品との差違あり、其運用の術に於ても彼常に我より一日の長あれば、日本人の強健勇敢も其多くを器械的戰爭に向つて發揮すること能はず、陸に於て朝鮮軍を驅ること虎の羊に於けるが如く、明の大軍をも亦小兒の群をあ

徳川氏の
世となり
て海賊軍
學なるも
のが盛に
行はれ
逸克流
磐尹流
野古流
賊古流
九鬼流
和泉流
菅長流
三島流
肥前流

川上流(尾張) 甲州(駿河) 一(品川) 合(阿波) 全(肥後) 流(三島) 營(江戶) 等の諸流 派を生ぜ

我が海賊と豊臣秀吉

しらふ如くに潰やし去りし我等の祖先は、海に戦つては眇たる一季
舜臣の爲めに窘められ、遂に完全なる制海權を我に占有すること能
はざりしにあらずや、之が爲めに我が陸軍の行動を澁滞せしめたる
こと幾許ぞや、秀吉が外征軍の重任は陸軍にあらずして寧ろ水軍に
在り、其兩度の出征全功を收むること能はずして終りたる重なる理
由は、出征の諸將の不和なりしが爲めにあらず、元帥其人を得ざり
しが爲めにもあらず、行長等の小刀細工を弄せしが爲めにもあらず、
秀吉の半途にして死せしが爲めにもあらず、我が當初の作戦計畫に
依りて、水軍は黃海に、陸軍は遼東に前進し、水陸の連絡を圓滿な
らしめて、輜重兵站の供給を充分にすべき豫定の行動を取る能はず、
陸軍をして懸軍孤立の窮境に陥らしめたるが爲めなるのみ、歴史は
此著大なる祖先の缺點を後世の日本人に明示し、維新の警醒以來偏
へに海軍の事に意力を傾注したるの結果、日清戦役と日露戦役とに

五峯は王 直の號也

我が海賊と豊臣秀吉

於て、倭寇と秀吉との失を償ふて贏りあるの功を奏し得たるは、諸
君予輩の熟知する所也
予は、強めて或者と或者との間に脈絡を見出ださんことを試むる
者にあらずと雖も、千古の英雄秀吉と絶代の奇傑王直との間に横た
はれる一條の連鎖に至つては、之を抹殺すべく餘りに惜むべしとな
さざるべからず、秀吉夙に王直の名を聞き、其將に外征軍を起さん
とするや、王五峯即ち王直の殘黨を召して、明の内情を問ひ、併せ
て五峯の事蹟を語らしむ、答へて曰く、『明將の五峯を執ふるや、其
殘黨の中我等三百の日本人は一團を組織し、南京より劫掠して横さ
まに福建に下り、一年を過ぎ、軍を全うして而して歸りぬ、明日本
を畏ること虎の如し、彼國を取らんこと掌を反すよりも易し』と、
秀吉喜んで曰く、『我の智を以て我の兵を用ひば、利刀を以て竹を破
るが如く、何の國か亡びざらん、我れ大明に帝たるべし』と、秀吉

が特に王直の殘黨を召して事を問ひ、而も其答ふる所を聞いて大に喜びたるものは、王直を以て自己の前に自己の事を行ひし者となし、己れ自ら王直の後に王直の事業を擴張する者を以て任じ、幽明相隔つれども俱に語るに足るの友を以て許し、彼假し今に存せば、對坐して大丈夫の心事を説かんものをとの情を起せしが爲めなるべし。

禁遏後の海賊的奇傑

秀吉の禁遏は海賊を進歩せしむ……世界を動かさんと企てし原田孫七郎……驕慢病に罹りて小兒に歸りし秀吉……狂に近き嗜烈の呂宋助左衛門……關白殿下は放買犯の親方……緝屋の食客政藏とオナカサホシ長政……旗竿の如き槍……亞細亞半部の主權者となるべかりしな……國性爺朱成功實は田川福松……快男兒彌兵衛……妖術使ひの天竺徳兵衛……伊非諾伊非册の舊地淡路島に生れたる小さく辛き高田屋嘉兵衛……海上の梟雄錢屋五兵衛……郡司成忠……奥平忠善……カナダキンケ相川之賀

秀吉喝令を下して全日本の海賊を屏息せしめしより、到底小島内

の局促を忍ぶこと能はざる豪放の徒のみ篩ひ残されて、一段廣濶なる南洋の天地に新舞臺を開き、破天荒なる浮連城を造りて、波濤の上に乗る獨立社會を組織し、傍ら外國に商業的移民を試むるに至り、我が海賊の行動は、却つて秀吉の禁遏に刺戟せられて光采を生じ、而も組織的なるものに進歩したり、随つて、雄圖大略を懐ける我が怪男兒等は、或は外征の機會を利用して英雄秀吉を傀儡にせんとするの原田孫七郎となり、或は浮浪漂泊の身を以て一躍暹羅王國の全權を握るに至りたる山田仁左衛門となり、呂宗助左衛門となり、天竺德兵衛となり、鄭成功となり、濱田彌兵衛となり、競うて海賊の系統より新流派を出だせり、後世の錢屋五兵衛、高田屋嘉兵衛の徒、亦是れ其根底に於て海賊の系統と連絡せる者にして、今日の郡司成忠、及び加奈太キングと稱せらるゝ相川之賀の如きも、其意氣抱負に於て、海賊的趣味を帯ぶること尠少ならざるを見る也、今是

等の海賊的人物の略傳に加ふるに評論を以てせん
原田孫七郎の出所既に奇也、兎に角日本人に相違無しと雖も、何の國何の地の産なるを知らず、唯其性の機智に富み冒險を喜ぶを以て著はる、一商賈の身を以てして、英雄秀吉を自己藥籠中の物となし、比律賓群島を征服して西班牙人を驅逐せんことを謀りし、我邦稀有の策士也、彼れ天正の初めより、御朱印船に乗り海賊船に難りて數々呂宋に渡り、容易に西班牙語に熟達し、細かに比律賓群島の形勢を觀察せり、此時に當り、比律賓は西班牙の屬領として、重鎮を設け大守を置かれ、彼が東洋經略の根據地に供せられつゝありき、西は墨西哥より秘露、智利の諸州に亘り、南は亞弗利加の諸蠻を併せ、而して東は印度一帶の沿岸より比賓律群島に及び、傲然として世界に雄視せし至盛時代の西班牙は、我がジバンギーに向つて垂涎の情に禁へず、頻りに商船と加特力僧とを我に送り、當時の歐羅巴

人が慣用せし宗教政略に依りて、先づ我が人心を盡感し、而して後徐ろに國土を舐め去るの陰謀を行へり、孫七郎炯眼蚤くも其内情を看破し、却つて我より呂宋を経略して印度に及ぼすの大計畫を創め、區々たる海賊の徒に依りて事を成さんよりは、巨頭の豊太閤を誘動して己れ其謀主たるに如かずと、膽略既に呂宋を呑み秀吉を提げ、蓋世の雄圖を胸底に秘して、飄然日本に歸り來れば、恰も好し、秀吉既に海内を平定して、將に大陸半島に向つて征討軍を送らんとするに忙はし、孫七郎以て乗ずべしとなし、近臣長谷川權六に依りて秀吉に説かしめて曰く、『殿下の威武既に諸蠻に輝き、朝鮮、琉球皆入貢し、明國の大と雖も、其非禮は直ちに雷霆の怒りに觸るゝを免れざるに、獨り南隣の呂宋に至つては、今に來聘の沙汰あるを承り申さず、是れ頑犢の屬が未だ英名を耳にせざるに由る、殿下若し御書を賜ひて某に附せられなば、孫七郎罷り向うて、彼の大守を叱り

懲らし、屹度引ずり參つて御前に平伏させ申すべし』と、是れ孫七郎の術數巧みに秀吉の自惚根性を利用して、傲慢無禮の書を作らしめ、之に依つて呂宋大守の怒りを買ひ、兩國の間に葛藤を生ぜしめんことを謀りたるもの也、非常にエラクして而も小兒の如く無邪氣なる點を有せる秀吉は、果して孫七郎の算する所に漏れざりき、乃ち語法の如何はしく意義の透徹せざる日本の漢文を作らしめて、孫七郎に與ふ、一字一句も改めず之を丁寧に直譯すれば、『夫れ吾邦百有餘年、群國雄を争ひ、車書軌文を同うせず、予や此時に際して誕生し、天下を治むべきの奇瑞あり、壯歲より國家を領し、十年を経ずして彈丸黒子の地を遺さず、域中悉く統一したる也、之に繇つて三韓琉球、遠邦異域、欸塞來亭す、今や大明國を征せんと欲す、蓋し吾の爲す所にあらず、天の授くる所也、其國の如きは、未だ聘禮に通ぜず、故に先づ群卒を使はして其地を討たしめんと欲すと雖も、

原田孫七郎商船の便を以て、時に來往す、此故に近臣を紹介して曰く、某早々其國に到り、而して備さに本朝發船の趣を説くべし、然らば則ち辨を解し筐を献ずべし云々と、帷幄を出でずして而して勝を千里に決するは、古人の至言也、故に禍夫の言を聽きて而して暫く將士に命ぜず、來春九州肥前に營すべし、時日を移さず降幡を偃せて而して來服すべし、若し旬旬膝行遲延するに於ては、速かに征伐を加ふべきもの必せり、悔る勿れ不宣、天正十八年秋季十五日』と云ふ也、珍無類の漢文、其自分勝手にして無理無法なること殆んど極まれり、蓋し孫七郎の意たる、此傲慢無禮の書を携へ至りて、之を西班牙語に譯し呂宋の大守に讀ましめば、彼れ必ずや激怒して、島夷身の程を知らずとなし、却つて其不敬を詰責するの返書を送らん、此に至つて秀吉亦其高慢の鼻を折られたるを憤り、征明の戰艦をして轉じて舳を南に向けしめ、我が謀即ち成るべしと云ふに在り、

孫七郎の眞の
關の界に
大勢に
係せり
以て
人前に
斯の如
東の如
を動か
べきか
大計す
しる者
無し

此たる一賈人の方寸に、世界の大大勢を動かすの秘機を藏し、眞に鬼神を憂へしむるの陰謀を懷きし也、原田孫七郎亦一奇傑なる哉、然れども、西班牙の呂宋大守は思ひしよりも軟骨にして且つ老獺也、秀吉の書を見て怒氣其面を衝きしと雖も、當時日本人の比律賓群島に移住せる者數百人ありて、其勇敢は土民及び西班牙人の恐怖する所たるを知る、加之、八幡船、日本甲螺の活動は、數々彼等の見聞して膽を冷やしし所なれば、此際怒りを發するは自己に不利也と思へり、乃ち加特力僧ジャンコボを使とし、書及び方物を齎らして肥前名護屋の陣營に赴かしむ、其書辭や甚だ曖昧、『比律賓群島の大守は曩に殿下の賜へる一書を受取れり、然れども其書は眞に殿下の賜へるものなるや否やを確信する能はず、果して殿下の賜へるものならば、比律賓大守謹んで服従の禮を行はん、但し本國の西班牙王に稟請し、其指揮を受くべきを以て、暫く猶豫あらんことを乞ふ』

とあり、天下豈他國に服従せんとして本國の指揮を待つ者あらんや、胡麻化しも此に至れば人を馬鹿にするの範圍に屬す、此時孫七郎は先づ回つて名護屋の陣中に在りしかば、彼が恭順の色を表し來れるを豫想外となし、大計書空しく書餅に歸せるに失望せしが、責めて書辭の曖昧なるを幸ひとして、秀吉を激怒せしむるの燃料に供せんとしたれど、我が大兵既に半島に渡りて、秀吉の心力全く之に集注し、亦他を顧るの餘裕無き時なるを以て、單純に呂宋の入朝を喜びて自己の勢威に誇り、使僧を勞ひ復書を與へて還し、彼が書辭の如何は措いて問はざりき、秀吉は他迄種氣を失はざる英雄ならずや、遠く海洋を隔てたる南蠻の歸服は、時に取つての此上無き吉瑞也と、孫七郎の功を賞して士班に列し、關白の御家人として食祿五百石を與へたる秀吉、何ぞ夫れ御人好きの極なる、孫七郎が有難迷惑の苦笑は、彼の自惚心滿々たる眼に見えざりしなるべし、予は、驕慢病

高砂國に
與へし秀
吉の書は
今前田侯
爵家に藏
せらるる
銀の地紙
に金の櫻
花紋あり
甚だ美麗
也、文中予
胎に在り
し時母日
光室に滿
るを夢む

に犯されたる老後の秀吉を描き、且つ評すべく、多くの興味を有せりと雖も、开は此書の主題以外に屬するを以て、後の機會に譲らざるべからず、兎に角孫七郎の遺憾は他人に語ることも能はざるだけそれだけ深甚にして、呻吟苦悶の底更に一奇策を案じ出だし、比律賓大守が服従の確答を促すべく、永祿二年再び航して呂宋に赴きぬ、途すがら高砂國即ち臺灣に至りて、秀吉の書を與へ、來貢を促し、遂に眞匪に着して大守に謁す、何ぞ測らん、使僧ジャンコボ一の行は、肥前名護屋よりの歸途風波の厄に逢ひて、船と共に海底に沈み、秀吉の復書が大守の手に達せざりしならんとは、多々益々辨ずるの孫七郎が智囊は、此に於て更に又一奇策を推し出だし、眞匪府在留の加特力教管長を訪ひて、太閤殿下が夙に西教を聽いて歸依の志深く、且つ管長の高德を慕ひ、其日本に來つて教化せんことを渴望するの旨を偽り述べ、首尾好く管長の使僧ペールゴンサル、大

諸人聞い
て驚愕せ
ざるなし
など云ふ
自慢の語
あり

守の使節ペールバチスト、及び珍奇の方物を贏ち得て、得々として再び名護屋に回る、兩使秀吉に謁して、墨西哥産の駿馬一頭、カスチリヤ産の美服一領、大玻璃鏡一面、鏤金の墨池一個、西班牙銀五百碼を獻じ、懇懃に待遇せられんことを期せしに、奇なる哉、太閤殿下毫も西教を信じ僧侶を敬するの容無く、却つて比律賓大守の服従の遅きを咎め、辭色共に厲しからんとは、兩使呆然たること良久うして、始めて孫七郎に一盃食はせられたるを悟りたりと雖も、今に至つて亦如何ともすること能はず、老獺なるバチストは辛うじて言を構へ、『大守の殿下を慕ふこと子の父に於けるが如くなるにも拘はず、本國の王命至ること遅きが故に、未だ來つて臣事する能はざるものなれば、臣等速に諭旨を大守に致すべし、其答書の來る迄は留まつて候たらん』と答へたるに、秀吉色忽ち解け、遂に彼の言に任せたり、惜むべし、孫七郎の奇策は再び失敗に歸しぬ、其後慶

長元年、 菲より墨西哥に赴く西班牙の商船サンヒリップ號我が土佐の浦戸港に漂着し、増田長盛往いて之を檢視するや、船長輿地圖を披いて、盛んに西班牙の版圖の廣大なるを誇示し、遂に長盛に其故を問はれて、漫に其禍の門を開き、先づ宗教を用ひて人心を收攬し、之を教唆して内亂を起さしめ、變に乗じて外より兵を送り、名を其鎮撫に假りて國家を顛覆し、自己の有に歸せしむるの慣手段をば、調子に乗つて面白可笑しく説明せしかば、長盛驚いて辭し出て、急ぎ還つて之を秀吉に告ぐ、秀吉聞いて西人の陰險狡獪を憎むこと甚だしく、直ちに其搭載の貨物を沒收して、縑子五萬反、金襴緞子五萬反、唐木綿二十五萬反、白絲十六萬斤、麝香、鸚鵡等を獲たり、乃ち之を禁中及び公卿、諸侯、大夫、士卒に頒ち、其船を逐ひ還しぬ、孫七郎之を聞いて機失ふべからずとなし、間を得て秀吉に謁し、我に留まれる呂宋の使節が、今や國禁を侮蔑して切支丹の邪教を傳

播し、愚民を惑溺せしめつゝありと告げ、呂宋大守の態度も亦甚だ怪むべしと説き、秀吉を激怒せしめて、慶長元年十一月、使節及び隨行の僧侶六人を長崎に磔殺し、次いで問罪の師を起すべく意を動かしめ、懸て大明を征服して後、鋒を南に向けんことを豫定せしむるに至りたり、孫七部の宿志此に於て酬いらんとして恰も秀吉の薨ずるに遭ふ、何ぞ痛恨に堪ふべけんや、而して、此失意の怪雄原田孫七郎は、其出所の神秘的なるが如くに其終末も亦神秘的也、何地に生れしか分らざる孫七郎は、何地に行きて終りたるか分らずなりぬ、險謀危策、愈々出て、益々奇なるの孫七郎は、真に覇者の師たるべき人物也、其出だす所の策常に孤峰の攀づべからざるが如く秀拔にして、必ず俗慮の至ること能はざる高所に着眼す、其最上策の行はれざるを見るや、深く大計畫を抛棄して胸中點塵を挾まず、決して中策を取り下策に就くが如き未練を残さざる也、鷹は餓ゑて

奇傑呂宋
助左衛門

も落穂を拾はず、英雄秀吉一たび死して、天下亦自己手中の傀儡に供すべき價値ある者無しとなし、一笑股子を投じて飄然として踪跡を晦ましたるの彼は、達人世を玩ぶの類ならずとせず

呂宋助左衛門は孫七郎と同時代の人也、家號を魚屋或は納屋と稱し、泉州堺の豪富にして、貿易を以て業となせり、助左衛門峭烈にして奇氣に富み、斬新奇抜を愛すること生命に過ぎ、平凡陳腐を厭ふこと死よりも甚だし、曾て私かに海賊船を出だし、呂宋を劫掠して還りしより、公然自ら呂宋助左衛門を以て名とす、後再び、國內の争亂に乗じて、不逞の浪人一百餘を集め、自ら將として呂宋を攻め、彼地の守備全からずして、大守の和を乞ひしを幸とし、寶器物産を滿載し、文祿三年七月二十日を以て堺に歸着す、會々石田空頭政澄堺の代官たりしかば、之を經由して、麝香及び蠟燭等の掠奪品を秀吉に献じ、且つ其携へ來りたる珍奇の茶壺五十個を示し、秀吉

の命に依りて之を諸侯伯に販賣したるより、茲に豫期せざるの巨利を博し得たり、助左衛門會て松永久秀に其才幹を偉とせられ、召して家士の列に加へられんとせしも、天馬空を行くが如く意氣抱負の高大なる彼は、眼中眇たる久秀無く、恩を謝して固辭して受けざりき、豈獨り久秀のみならんや、彼の眼中亦關白殿下無く、遂に秀吉の忌諱に觸れて身を亡ぼすに至りぬ、助左衛門を以て原田孫七郎に比較するに、彼の如き高朗の懐、雄大の略を有せず、人物としての價值一段を下ると雖も、其狂に近き峭烈の氣を用ひて、好んで時代と色を異にし、人を凌いで何者にも譲らざりし傲骨に至りては、確に一世の快男兒と稱するに足る、而して、孫七郎は海賊の系統より流派したる海賊的趣味の奇傑也と雖も、彼が自ら純然たる海賊を行ひしことあるを聞かず、助左衛門に至りては、獨り海賊の系統より流派したる海賊的趣味の奇傑なるのみならず、海賊を以て自己の

本職となし、其掠奪品を關白殿下の座前に陳列して、大名を相手に商賣を始めたる男也、贖品を購ひて得々たる大名も可笑しけれど、此方面より見れば、日輪の子也と自稱して外國を威嚇する關白殿下も、要するに故買犯の親方ならずや

山田仁左衛門は駿河國安倍郡葦科郷の産也、初めの名を政藏と呼ばれ、一貧農家に生る、幼にして奇偉、膂力あり、村内の群童を集めて、餓鬼大將となり、従はざる者あれば痛く之を責め懲らすに、村人之を憎むこと蛇蝎の如く、父母亦其狂頑を持て餘まして出家せしめんとす、政藏乃ち逃れて駿府に奔り、親戚紺屋嘉兵衛に依る、既にして稍々長ずるに及び、書を讀み劍を學んで士たるの道を講じ、而して後出て、天下を週遊すること數年、志を得ずして再び駿府に還る、是れより政藏を改めて仁左衛門尉長政と自稱す、蓋し長政の志望たる、區々たる諸侯の臣隸となりて、五斗米の爲めに腰を屈せ

んとするにあらず、天下の虚に乗じて風雲を捲き起し、覇業を成さんことを希ふ者也と雖も、時既に元和偃武の後にして、大勢の定まる所又獨力の動かすべきにあらず、天下の諸侯伯も亦丈夫兒の事業を談ずべき可燃性の快談を残さずして、一世皆太平に酔ひ、我の獨り醒めたるを晒ふ、天下を週遊すること數年にして更に一個の我に似たる者に逢はず、何ぞ其寂寥なるや、彼を知れりと稱する者も、畢竟彼の皮を相たるに過ぎずして、其志を得ず人に侮らるゝを憫み、主を求めて事へんことを勸む、就中紀伊侯頼宣に重用せらるゝ一友人あり、長政を導いて其君に見えしめんとす、長政笑つて曰く、「我が願ふ所は人の主たるにあり、人の臣たるにあらず」と、一語其平生の襟袖を散じて胸懐洞然、其人嗚然として語無く、匆卒に辭し去りぬ、長政後に於て腹を抱へて晒ふこと半時、近來の愉快也とて獨り喜びしと云へり、斯の如く儻不羈の長政をして、斯の如き沈滯

抑塞の時代に生れしむ、盍んぞ久しく國內に局促たるに堪へんや、竟に海外に向つて雄圖を披くの已むを得ざるを自覺し、其寄食する所の紺屋嘉兵衛が姻戚小西甚兵衛に依りて、駿府の貿易業者瀧左右衛門、太田次郎右衛門に説き、彼等に隨ひて南方に赴かんことを企てたり、然れども、二人は長政の豪放にして産を治めず、剛強にして大志を懐けるを知る者也、斯の怪物を伴ひ行かば、外國に至りて如何なる椿事を仕出來さんも測り難しとて、憤らせぬ様事に托して、驕好く謝絶したり、長政其意を悟りて強て乞はず、却つて二人に先だちて大阪に至り、二人の定宿に在りて彼等の來るを待ち、慇懃に同伴を乞ひたるに、二人は氣の毒にもあり底氣味悪るくもありと、是非無く長政の同船を許し浪華の津を離れたる處、其厄介なること勿々以て並大抵にあらず、自ら船中の大王の如く振舞ひ、少しく氣に入らぬ事あれば、誰彼の別無く叱り懲らして、動もすれば鐵拳に

訴へ、一々物事に理屈を附けて、議論休む事無く、二人は勿論、海賊上りの船頭水夫、鬼とも組まんずシタ、カ者共迄、長政を恐れ憚ること疫病神の如く、困つた者に舞ひ込まれたりと呼き合ふばかりなりしが、纏て臺灣に寄港したる時、如何思ひけん此地に留まりたしと申立てたれば、二人は厄介者を拂ひ退けたりとて、心中大に喜び、若干の銀子を與へて別れ去りぬ、其實、利かぬ氣の船頭水夫共が、長政を暗殺して海に投ぜんとの密議を凝らせるを、蚤くも明敏なる長政に察知せられて、逃れ去られたるものなるやも測り難し、斯くて長政は臺灣に在ること數ヶ月、蕞爾たる一小島竟に覇を圖るの地にあらざるを知りて、更に南行の機會を求めつゝある折しも、南蠻の暹羅が其隣國六昆と戰ひて形勢甚だ非なるの報に接し、躍然手に唾して起ち、直ちに便船に乗じて暹羅に赴きぬ、時方に日本甲螺の威名南洋に振ひて、暹羅國亦邦人を畏敬すること深く、海賊的

健兒及び豊臣氏の遺臣の彼地に渡れる者に對して、特に國都の外廓に居留地を與へ、日本街の繁榮本國に見るべからざるの奇觀を呈せる際なりしかば、孤劍飄然として船より出てたるの長政は、何の注目にも價する者にあらざりき、而も一旦高邱に登りて兩國の對陣を望觀し、暹羅軍の必ず敗るべきを豫言して的中するに至りたるや、長政の英名俄に日本街を震動し、遂に暹羅國王に招聘せられて將軍に任ぜらる、此に於て長政は、日本駿府の紺屋の食客たりし時代より、重なりたる爵屈を披くの機會を授けられたり、即ち日本街に健兒を募り、自ら携ふる所の櫃を開きて、緋威の大鎧を着け金の鉄形の兜を戴き、五尺の大太刀を鷗尻に反らして佩き、軍配を取りて招きたる程に、夢寐にも戰場往來の快味を忘れざりし日本街、諸勇士は、素破大將軍地より湧き出てたると小躍りして、豫ての嗜みに仕舞ひ置きたる、思ひくの具足に身を固め、八尺の弓、四

尺の箭、背の厚く身の廣きこと鈍の如きの剛刀を提げ、旗竿の如き柄にて二三人を串刺にすべき穂長の鎗を燃り、其旗下に馳せ集まる者五百餘人、長政大に喜びて、此者共を先手に押立て、暹羅の軍兵二千人に日本風の武裝を施したるものを後手となし、密に人を四方に出だして、『山田仁左衛門尉長政と云ふ豪傑を大將として、一萬の精兵日本より暹羅の援軍に來りたり』と云ひ觸らしければ、六昆國の兵戦はずして先づ色めきたるを、長政好き潮合ぞと采配打振り、五百の日本男兒宛然白き光の塊りと見ゆるばかりに大太刀穂長槍を舞はし閃めかせ、雷の如く喊の聲を合はせて殺到し、忽ち粉の如く六昆軍を踏み散らして其副將を擒にしたるの有様、敵も味方も人間業にあらずと舌を捲けり、暹羅國王其偉功を激賞して、直ちに長政を上將軍に拜し、兵馬の全權を委ねて再び六昆の軍を迎へしむ、扱て此第二回の戦ひこそ、眞に長政の技倆を現はし日本男兒の勇武を

示すべき大試験にして、六昆の再舉軍は其國力を盡して十萬の多數に上り、山野に充滿し草木を蹂躪して進み來りたるを、長政少しも騒がず、面色土の如くに變じたる國王を慰むるに平然たる微笑を以てし、進んで六昆軍を迎へしが、先づ偽り負けて敵を山麓海岸の狹隘に陥れ、伏兵を發して挾撃せしかば、敵軍大敗、斷崖の下怒濤の間に盛められて、死する者數萬人、長政北ぐるを追ひて六昆の都城に入り、其王を擒にして還る、此に於て長政は六昆の地に封ぜられて王となり、暹羅の大臣を兼任し、暹羅國王の女を嫁せられ、國政軍政の總首長に昇りぬ、印度の諸國使節を送つて之を賀し、長政の名亞細亞の半部に震ふ、紺屋の食客政藏の得意想ふべし、長政又功に依りて逸比留の地を併せ領し、加之呂宋船の來寇を撃退して、白人にも畏憚せらるゝに至り、勞威益々盛なるより、己が今日の狀態を故國の人に傳へ知らしめんと希ふ折柄、恰も好し、我が後水尾天

皇の寛永三年徳川家光執政の時、駿府の貿易商桑名屋清右衛門、富田屋五郎右衛門の二人暹羅に至りたり、此二人は前年長政を臺灣に伴ひ至りし瀧、太田の同業者にして、豫て長政と一面識ある仲なれば、長政是を願ふても無き機会と、先づ六昆及び逸比留の王たる資格を以て、二人を引見し、壯嚴なる儀式に依りて其權威を示し、優渥なる待遇に依りて其恩徳を知らしめ、了つて後紋服短袴の和装をなして彼等の旅宿を訪ひ、「兄等予を知れりや、粗放を以て兄等に疎んぜられし、蕪科郷の山田仁左衛門也」と名乗りて、二人を驚倒せしめたり、乃ち軍艦の圖を繪きたる扁額を出だして二人に附し、携へ還りて駿河の淺間神社に之を納めしむ、惜むべし此頼明和の火災に焼失したりと雖も、今日猶ほ其摸寫圖を軸に製して同社に保存し、『奉挂御立願成就具備之所當國生今天竺暹羅國住居寛永三丙寅年二月吉日山田仁左衛門長政』の數十字は、農夫の子にして餓鬼大將たる

長政と共
に功を立
てし日本
人津田又
左衛門木

政藏より、六昆及び逸比留王たる長政に至る迄の快男兒の歴史を語りつゝあり、其後長政の知己たる暹羅國王は病を得て歿し、奸佞なる宰相高班は淫縱なる王后と通じて、幼弱の新王を煇弑し、長政も亦奸策を免るゝこと能はずして、遂に其毒殺する所となりぬ、享年四十四歳、實に我が明正天皇の寛永十年春也、熟らく長政の幼時を視て、其壯歳より横死に至る迄の経過を吟味するに、彼は英雄秀吉と同型の人物也、若し秀吉をして天文五年に生れしめずして天正十八年に生れしめ、元龜天正の群雄割據時代に遭遇せしめずして、元和偃武の後に遭遇せしめば、其經天緯地の才も用ふるに地無く、必ずや長政の開きたる進路を開きて、長政の爲したる所をなすの外あらざりしならん、最も長政に取るべきは其眞摯なる血性男兒たりし事也、彼の英雄を以てして、彼の部下たる日本人を率ゐ、而して印度諸國に震ひたる彼の威名を用ひしめば、獨り六昆及び逸比留の

谷久左衛門、大塚十左衛門、後藤又六、明智十太夫、有賀門太夫、第皆餘々たる人傑也

功・後・士・鄭・成

王たるに留まらず、暹羅國王に取つて代るも亦極めて易々たるべき也、彼をして自己の名を成さんが爲には何物をも犠牲に供するの陰忍あらしめば、亞細亞大陸の半部を征服して、秀吉が夢想せし大皇帝の地位を現實せしむるも、亦甚だ難からざりしならん、然れども長政は義士也、多血漢也、暹羅國王の知己に感激すること深く、忍んで彼に加ふること能はざりし也、遂に倭人の毒手に罹りて、前途測るべからざるの英雄を四十餘歳の壯齡に亡ふ、彼の後半生の活劇の爲めに飾らるべき世界の歴史は、此に於て白紙となりぬ、史を修して一に何を痛恨事の多きや、予が長政の中道にして斃れしを悲むこと、王直のそれを悲むに譲らず

鄭成功は明人鄭芝龍の子にして、我が平戸島河内浦の足輕田川七左衛門が女某の腹に生れ、邦名を福松と云ふ、此人明末清初の遷轉期に遭遇して、孤忠明朝の回復を圖り、死に抵る迄志を變ぜざりし

義烈の士也、其死後六十年にして、大詩人近松門左衛門の筆に入り、國姓爺和唐内の英名は、今に至りて兒童走卒の耳にも熟し、更に名優團十郎の妙技に美化されて、彷彿として其面目を吾人の眼前に活躍せしめたりき、父鄭芝龍落魄して支那を去り、元和九年平戸に來り住み、其容貌の秀麗なるを以て田川氏の婢となりしが、福松及び次子七左衛門を生みたる後、二十三歳にして海賊顔思齊の黨に入り、思齊と共に臺灣に渡り、思齊の死後代つて海賊の首領となり、日本及び支那の亡民を率ゐて劫掠を事とし、後明朝の招きに應じて往いて臣事し、南安伯に封ぜられ、顯榮の身となりぬ、此に於て、僅に七歳の福松は、父に迎へられ母に離れて明に至りぬ、福松長じて二十三となり、恰も父が海賊の群に入りたる時と齡を同うするに至るや、父の秀麗に加ふるに母の端嚴を以てし、儀容凡を抜きて玉に餘あるが如し、彼は此歳に於て父の如く海賊の群に入らず、却つて明

主に召されて其宮廷に入れり、秀偉の容姿、英傑の膽才、一見深く明主の愛重する所となり、背を撫して忠を盡さんことを求め、詔して國性の朱を賜ひ、名を成功と改めしむ、時方に明朝の末期、衰色既に旗影を籠め、家國の危きこと累卵の上に座するが如くなりしを以て、此奇偉の青年に回復の成功を依頼したる明主の意は蓋し淺からざりし也、乃ち日本平戸島の田川福松は、一躍して明朝の柱石朱成功となり、其母田川氏を迎へて孝義を全うしぬ、是れ我が後光明天皇の正保年間の事也、既にして明朝清の爲めに亡ぼされ、遺臣張肯堂、黃道周、鄭芝龍等義旗を福州に擧げしと雖も、戦ひ敗れて、成功の母田川氏は城門の樓上より自刃して江に投じ、芝龍等退いて厦門を保つに至れり、然れども、芝龍は智麻りありて義足らざるの輕薄才子流也、其遂に事の成るべからざるを測るや、清の招きに應じて志を屈し、成功の極諫を用ひずして、出て、降服したり、成功

大に憤慨し、自刃して敵の虜となるを免れし母田川氏の日本人的義烈を想へば、渾身の血液沸騰して、五體然ゆるが如く、誓つて我が背を撫せし明主の手尙ほ餘温あるを覺え、頭骨を盃にし身を醜にせらるゝも、誓つて清の粟を食まずと、決然父に別れて孔廟に入り、着くる所の儒服を焚いて謝し、高揖して去つて武人となる、是れより海島に義軍を集め、船に據りて倭寇の慣手段を用ひ、清軍の虚を衝きて屢々奇功を奏せしと雖も、力微にして竟に全功を成し難きを知り、正保四年我が幕府に書を送りて援軍を乞ひたるが、幕府は嚴に鎖國令を守り、之に對して報ずる所なかりき、然れども成功は志を挫かず、小を以て大に當り、着々勝利を收め、終には、明の皇子永明王が清軍に逐はれて雲南に流浪せるに逢ひ、之に功を賞せられて延平郡王の封を受けしかば、成功感激措く能はず、王の永曆十二年兵二十萬戰艦八千隻に將として、大舉南京を復すべく、十三年鎮

江を取りて金陵に至り、檄を四方に傳へて諸州響の如くに應じ、大業將に成るに垂んとしぬ、憾むべし清に名將梁化鳳ありて、江南の一戰我が軍大敗に歸し、辛うじて帝位に即きし永明王は蒙塵して存亡を詳かにせず、成功亦長く厦門の根據地を保つこと能はずして、父芝龍が曾て海賊として據有せし臺灣に退き、和蘭人の之を占領せる者を逐ひ、茲に朱明の祀を存して其正朔を奉じ、善政を施して土民を撫育すること數年、北の方生國の日本に商船を送りては貿易を營み、南の方比律賓群島に軍艦を送りては征略を試み、而して深く實力を養ひ、清朝に對峙するの一敵國を以て任ぜり、清帝大に怒りて其父芝龍及び一族の京に在る者を殺戮するに及び、成功の復讐心は愈々盛んにして、他日大に成すあらんことを期せしが、天此義烈の英傑に年を假さず、比律賓の征略軍眞匪を襲ひて、西班牙の大守之を防ぐこと能はず、將に城門を開いて守兵を撤退せんとするに臨

み、會々成功の計至りて、臺灣兵自ら退き回りたり、成功死する時齡僅に三十九歳、其病は熱病の種類也と傳ふ、或は今日のマラリヤ熱なるか、抑も亦其燃ゆるが如き熱血に臟腑を爛らし盡し、ものなるか、成功死後子孫三世に連りて、明の正朔を奉ずること二十年、孫克棟幼冲にして清將施琅の亡ぼす所となりぬ

濱田彌兵衛、彼も亦海賊的趣味の快男兒也、長崎の産にして貿易船の船頭を業とす、勇敢多力にして謀略あり、其弟小左衛門、其子新藏共に膽氣ありて膂力數人を兼ね、寛永五年臺灣に至るや、時方に和蘭人此島を占有して、鄭成功未だ住まず、而も和蘭人亦海賊の屬にして、我が商船の印度地方に赴く者を海上に要して殺掠すること屢々なれば、之が爲めに貨物を失ひて臺灣に流浪せる邦人等は、剛強なる彌兵衛が其一族の健兒と共に來りたるを見て大に喜び、衆交も訴へて復讐を依頼す、彌兵衛快く諾し、先づ日本甲螺の徒二十

人を率ゐて回り、幕府に具申して自ら其任に當らんことを請ふ、有志之を壯とし、長崎の代官末次平藏に命じて船を繕せしめ、兵を募りて彌兵衛に與ふ、彌兵衛即ち數百の徒卒に農夫の装ひをなさしめ、蓑笠を被り鋤鍬を把り、遂に臺灣に至りて土地の開墾に任ぜんと示す、和蘭の甲比丹、彼等の面魂の尋常ならざるを見て、暗に其異圖あるを疑ひ、城外に留めて嚴に監守す、此に於て彌兵衛は其勇斷を用ふべきの時に會せり、一日拂曉、彌兵衛、小左衛門、新藏三人決する所ありて城に入り、甲比丹の館に上り、閤を排して其寢室に闖入す、彌兵衛先づ進んで甲比丹を臥床の上より引ずり落し、捻ぢ伏せて馬乗りになり、短刀を咽喉に押當て、叱咤其罪を詰責す、小左衛門、新藏は又刀を提げて侍衛の武士を遮り、甲比丹をして號泣哀を乞ふの已むを得ざるに至らしめたり、彌兵衛乃ち左手に甲比丹の臂を扼して引き起し、右手其短刀を握り、小左衛門、新藏に前後

を擁せしめて城門に登り、甲比丹をして其部下の兵の我が從卒に向ひ發砲するを停めしめ、更に從卒をして南蠻船一隻日本船二隻を繕せしめ、我が商船を劫掠したる報償として、白絲一萬二千百十三斤、銀子百一貫八百四十七文四分、此利銀二十二貫五百六十文六分、併せて百三十六貫四百八文を收め、且つ甲比丹を中庭に縛し置くこと七日、其間盛に掠奪を行ひて、終には甲比丹を日本に伴ひ去らんとす、甲比丹又十八番の號泣を用ひて辛うじて免され、代りに其子十二歳なる者と頭目數人とを質とし、日本人は一個を失はずして揚々還り來る、彌兵衛の勇名一時に震ひ、肥後侯細川氏に厚祿を以て聘せられ、士班に列す、予は彌兵衛の人物に就いて別に深く評する所無し、唯其寡を以て衆を挫き、奇計を用ふるに膽勇を以てしたるの遺り口に、頗る倭寇流の臭味を帯びつゝあるを見るのみ

天竺德兵衛の名は、兒電也と並び稱せられて、蝦蟇の妖術を使ふ

怪しき漢子の部に屬し、演劇若しくは草々紙中の人物にして、作者が空想の産物の如く世間に傳へられつゝありと雖も、是も亦海賊的趣味を帶べる現實の奇男兒也、徳兵衛姓を米澤と云ひ、播州高砂の人、元和五年加古郡船頭町に生る、人となり粗放にして物に拘はらず、幼より文字に親むことを好み、十歳にして筆下に章を成す、人稱して奇童となす、十五にして御朱印船角倉與一が船長前橋清兵衛の書記となり、寛永十年十月十六日を以て長崎を發し、翌年三月三日南天竺摩訶陀國流砂川を溯ること三里なるハンテイヤに着し、一年間天竺の内地探檢に従事して、十二年四月三日流砂河口を發し、八月二十一日長崎に還る、翌十四年十一月十四日再び長崎を發し、十五年二月十八日摩訶陀國に着し、同年八月十四日を以て恙なく長崎に歸着す、徳兵衛の目的とする所、奇異なる風景及び人間の生活に眼を新たにし、珍貴なる天産物及び器什を求め得て自己の嗜好を

満足せしめんとするにありて、他の國內に不平なるが爲め、或は境遇に迫られて、已むを得ず波濤を家となすに至りたる者とは、自然に其趣味を殊にし、樂んで探險を事とし、遠洋航海を喜んで一種の遊興となし、者の如し、藩主榭原氏が之に終身五人扶持を給したるに由れば、其探險の効果は頗る日本の貿易業に便益を與へしなるべく、妖術を使ひて自由自在に財寶を吸收するの大賊と傳へられたるに由れば、探險の片手間随分異國の珍品奇物を懐に捻ぢ込みしものなるべし、著す所、日記天竺聞書あり、紀行渡天物語あり、貞享年中病で歿す、或は云ふ寶永四年九十八歳にして死すと、貞享年中と寶永四年とは少なくとも二十年の差あり、死歿の年月の明確ならざる所、此人の傳記に妖氣を帯びしむるの一理由なるに似たり、其渡天物語の一節を記さん、曰く「靈鷲山の廻には多羅葉の木大方御座候釋尊御存世御說法の時此多羅葉に聞書被成候由今に毎年落葉仕候

色々の文字残り有之候デヒヤタイの長老に此一葉申請候て日本に持
 參致し播州高砂十輪寺へ納置候此長老は私天竺にての私宿仕候木下
 六左衛門と申候人の内室右長老の妹にて此所縁を以て申請候右六左
 衛門は日本にて三百石程取候侍にて帝王の御番衆大納言に當る位の
 由申候」と、木下六左衛門なる者、亦山田長政の亞流ならん、而も
 其紀行の他の一節に、長政に關する説話あるぞ興味なれ、「彼流砂川
 はシヤム國とマカタ國との境にて川口より三里川上にハンデビヤと
 申す城あり此處にて日本の御朱印を改めマカタ國の都王城へ早船に
 て改手形を差上申候右シヤム國ハンデビヤの城主はオヤカウホンと
 申候侍大將にて位はナンフウと申位の由日本にて右大臣の位にて御
 座候由此オヤカウホンと申す人本は伊勢山田の御師の手代にて國々
 を相廻り申候が何方にてか日本の地にていたづら事候て御詮議につ
 き長崎へ欠落いたし折ふしシヤム國の出船ありて其船に便船致しシ

ヤム國へ渡り國王の下知にて所々の軍に手柄どもいたし候故國王の
 婿になり其上後にはシヤム國の大將と成申候由日本にては山田仁左
 衛門と申候へ共天竺にてはオヤカウホンと申候、長政の經歷に些か
 聞き誤りあるなど却つて面白し、オヤカウホンの長政が、非常に日
 本人を歓迎して、出來得る限りの便利を與へしと云へば、徳兵衛も
 亦其恩典に與り、オヤカウホンに拜謁して言語を交へし者なるべし、
 奇男兒と怪男兒との對面、如何に演劇的趣味なりしぞ

其他倭寇禁遏後に於て、南方の海洋に活躍の舞臺を求めたる、海
 賊的趣味の快男兒少なきにあらずと雖も、就中最も其人物の奇偉な
 る者及び其經歷の多趣味なる者を選びて、全豹を知るの一斑に供し
 たる也、而して予は、以上の外に幕末の快男兒高田屋嘉兵衛、錢屋
 五兵衛を擧げて、海賊的趣味の奇傑が、連綿絶ゆること無く其系統
 を繋ぎ來れるを見んと欲す、單純なる劫掠の倭寇が、劫掠的性質を

帯びたる貿易者に進化し、劫掠的性質を帯びたる貿易者が探検的性質を帯びたる貿易者に進化したる、總て是れ時代の轉變に伴ふの轉變なるのみ、而して、苟くも海賊的氣風に養はれ、其潮流の中を通過し來りし人物たる以上は、如何なる英傑と雖も、必ず其時代に依つて異なる海賊的趣味を帯びざるは無し、單に海賊と云へば其範圍狹しと雖も、海賊的趣味と云ふに至れば範圍頗る廣く、中に數千年の歴史を包み、美化され詩化されたる分子を含めり、讀者混同すること勿れ。

高田屋嘉兵衛は、後櫻町天皇の明和六年淡路の一小島に生れたる主角多き奇男兒也、島根性の強き小さく辛き男也、少時より船戸に就はれて、仲仕、小揚の勞働をなしたが、亦是れ山田長政流の「人の主たるを得れども、人の臣たる能はず」てふ厄介物にして、好んで人と觸れ、争ひを起すの癖あり、衆皆之を厭うて排斥す、嘉兵衛

乃ち諸弟を率ゐて兵庫に赴き、一心不亂死者狂ひに働きて金錢を貯へ、遂に大船を造り得て、珍異の貨物を搭載し松前に至り、稍々財富を致せり、然れども、全身覇氣の塊りにして、冒險を愛すること酒色に過ぐるの嘉兵衛は、平和なる商業を能事とするの單調に堪へずして、大に爲すあらんことを期し、機會の至るを待ちつゝありしに、時恰も光格天皇の寛政十一年徳川家齊執政の世、幕府千島の蝦夷を招撫せんとし、有司に命じて諸島を巡視せしめ、南部津輕二侯をして、成卒を發して邊警に備へしむ、此時代に於ては、千島を以て人外の境となし、海路遼遠、風濤險惡、蝦夷の小舟の外船舶を通ぜざりしを以て、死を恐れざる冒險者にあらざれば、到底其航海の任に當ること能はず、二侯乃ち令を下して能く航する者を募る、而も慨然として之に應じたる者は我が嘉兵衛なりき、因つて巨船を發して、國後に至り、風潮を洋中に候ふこと二旬、我が極北の洋海は、

其秘密を蔽ふこと能はずして、千尋の底迄も嘉兵衛の炯眼に洞觀せられたり、曰く「潮路分れて三となる、能く潮汐の衝突を避けて往來せば、航行安全にして他に暗礁の恐れある無し」と、即ち帆を揚げて直ちに擇捉に至る、夷民半ばは穴居して、唯川に上るの魚を捕へ、魚族沿海に充滿するも之に擬するの漁具を有せざるを見、命じて海濱に漁場十七個所を開き、漁具及び衣食を夷民に給して其業を勵まし、諭すに國恩を以てす、夷民始めて日本國の公明にして仰へべきを覺り、日本人の仁愛にして敬ふべきを知り、相率ゐて悦服す、擇捉の始めて我に屬し、擇捉諸島の航路始めて開けたるは、實に高田屋嘉兵衛の功也、享和三年功を以て公廩を受け官船を領し、厄介物嘉兵衛の名大に揚がる、是より後嘉兵衛屢々其勢力範圍の新天地と往復して、有を以て無に易へ、彼を潤ほして而も我を充たしめ、業務を擴張して、支店を松前と函館とに開き、幾ばくも無くして豪

富を致す、文化九年露人リコルド事を以て我を恨み、來つて我を襲はんとし、我の備あるを見て止む、嘉兵衛會々擇捉より干魚を積みて函館に回らんとし、路國後を過ぎ、岸上に兵備あり洋中に黒船あるを見て大に怪む、忽ち一隻の蝦夷船あり、中に紅毛碧眼の人類を充たし、近づき來つて頻りに鳥銃を發す、事全く不意に出て、我が水夫皆圍志無く、或は船底に懾伏し、或は海に投じて逃れ、船體及び貨物を擧げて彼の捕獲に任せぬ、太平日久しく、我が海上健兒の意氣衰へたりと云ふべし、若し是等の水夫をして戰國時代前後の海賊的勇士たらしめば、汝が豆の如きの彈丸何ぞ我が大羽箭に當るに足らんやと、必ずや健闘一番、跳つて彼の船に入り、四尺の長刀赤髯の首を撫て切りにしたるならんを、嗚呼此時代に於ては日本男兒の佩刀も亦細く短く華奢になりてけり、然れども、茲に五尺の小身渾て是れ膽なる嘉兵衛氏あり、醜虜に迫られて露艦に移るや、衣を

の明和八年加賀國石川郡宮腰浦に生る、父五兵衛死して五兵衛其名と家業の船商を繼續するや、其丁稚時代よりの主家たる、近村粟ヶ崎の豪商木谷藤右衛門が一千金を投機事業に流用して、見事に空手となり、遂に同輩の告發する所となりて獄中に坐す、然れども五兵衛の大膽にして且つ多策なる、主家木谷が自己の才幹を重んずるを知りて之を利せんとし、木谷を法廷に出頭せしめて、暗に目を以て哀を乞ひ、一千金は商略上機密に主家より支出せしものにして、敢て自己の私消したるにあらざるを辯明し、木谷をして其事實なるを證言せしめ、難無く放たれて還ることを得たり、驚くべき大膽、驚くべき狡猾にあらずや、會々加越能三州の地に北海道産の干鰯肥料を用ふるを許さざるの藩禁解けたり、五兵衛以て機失ふべからざるものとなし、直ちに所有船を松前に送りて干鰯を満載し來り、一攫巨利を占む、其後天保の飢饉に際し、加賀藩金を富商に借りて救濟

に充つ、五兵衛亦之に應じて、一躍御用商人の位地に上り、舊主木谷と比肩するに至れり、而して、藩廳飢饉の善後策を講ずべく、領内の御用商人を召集して之に諮問するや、木谷等の富豪皆策の出づる所を知らず、黙して答ふる者無きに、大膽狡猾の五兵衛は仕済ましたるごと末座より進み出てたり、曰く「財政を整理し、國力を増進するの術は、商利を開くに如くはなし、官若し下拙をして事に當らしめば、成算は這裡に在り」と、軽く胸を叩いて微笑し、百萬石の領内より選ひ出だされたる巨商大賈を後に蔽ふて、眼中に人無きが如し、有司亦其氣魄に呑まれて其言を壯とし、急に二千石の大船二隻を新造して五兵衛に附與す、占めたり、天下は我物也、輓幕提灯皆藩主前田侯の紋章梅鉢を用ひ、加州侯の御用船と稱し、自己の私有船も亦皆此裝飾を施して藩船に擬し、百萬石の勢威と信用とを振り廻はして、日本の周圍至らぬ限なく、自身は又堂々として加賀

藩の海上主權者と稱し、苗字無くして幅の利かざる憾あるを以て、新に清水五兵衛と稱す、而も五兵衛は財界の梟雄也、大藩の名義を利用して私腹を肥やすこと夥しきもの也と雖も、同時に藩の財政を救ひたるの功非常なりしを以て、人之を非難すること能はず、終には國禁を破りて、擇捉海上の烟波に隠れ、露船と密貿易を營むこと再三なりしも、其多數の所有船を間斷無く運轉して、人目を晦ますこと頗る巧みに、毫も破綻を示さずして了りぬ、此に於て五兵衛の財富積んで山を成し、海内無双を以て稱せらる、晩年三男要藏をして功業を成さしめんとし、自ら設計して、同國河北潟を埋め新田を開くの案を立て、官に請うて許可を得、要藏をして工を督し事を創めしむ、河北潟周回七里、沿岸の住民漁業を以て生計を立つる者多く、錢屋の工事を以て自己の産業を奪ふ者となし、物論沸騰非難百出す、時方に嘉永五年春夏の交也、偶々、石灰を土砂に混じて石灰

油を注ぎたるものを水底に投せば、土質を緊肅せしめて埋立てに利便なるべしと獻言する者あり、五兵衛之を容れて直ちに實行すれば、豈測らんや、水中の魚族悉く醉死して腹を露はし、同時に金澤市中に吐瀉病の流行を來し、延いて其近郡に及ぼし、死者枕を並ぶ、皆曰く、河北潟の魚を食せしが爲め也と、沿岸の漁民乃ち之を好機として、錢五が毒物を水中に投じたるを訴ふ、五兵衛父子遂に執へられて磔刑の宣告を受け、五兵衛は未だ刑を受くるに及ばずして、同年十一月獄中に老死せり、高齡實に八十二、五兵衛の經歷渾て是れ奇ならざるは無く、最後に奇禍に罹りて、奇なる老死を遂ぐ、徹頭徹尾彼は奇男兒たるの面目を失はざる也、五兵衛の大膽にして狡猾なる、或は眞に訴ふる者の云ひしが如く、河北潟に魚族を絶滅せしめて、工事を妨ぐる漁民の膽を破らんことを企てたる者なるやも知らず、彼は竟に自己の大膽狡猾の爲めに亡ぼされたる者なるか

明治の今日亦海賊的趣味の奇男兒に貧しとせず、端艇隅田川を發して千島探險を試み、報効義會を組織して絶域の占守に苦寒と闘ひ、日露の交戦に乗じて、縦まゝに露領の地を日本領に編入するの宣言を發し、遂に勘察加を襲ひて彼の詭計に陥りたる郡司成忠の如きは、目して其一人也となすこと能はざるか、近頃、占守島の北の方更に七百二十哩、白令海上のコンマンダースキー島附近に密獵船を浮べて、露國守備兵の目前を横行しつゝ、盛に臘虎、臘肭臍、海馬の水獸を捕獲し、時として英國の密獵船に遭ひて波上の交遊を味ひ、或は露國の守備兵と衝突して寒潮の上に火を飛ばすの活劇を演じたる、一種の海賊王奥平忠善あり、此人が舊豊前中津藩主伯爵奥平昌恭の叔父にして、本年二十三歳の青年たる、坐ろに南北朝時代の海賊大王村上師房が、縉紳の家に生れて、書中の人の如き好青年たりしことを想はしむ、到底我が海賊的豪傑は、詩的空想に驅らるゝ多血漢

たるを免れざるが如し、而して更に吾人の注目し價すべき快男兒あり、現に加奈太に在りて、加奈太在留日本人の王と稱せらるゝ相州之賀是れ也、之賀は上州伊勢崎の素封家の子、明治十八年五月齡纔に十九歳、獨力を以て桑港に渡り、勞働を以て自ら給し、具さに困苦を嘗めしの後、志を決して北方一千哩のシャートルに赴き、勞働八ヶ月にして三百弗を貯蓄し得たり、即ち白人四名日本人十三名と資を合して、二本櫓の臘虎船一隻を四千弗に購ひ、痛快なる遠洋漁業を企て、一千八百八十八年の四月より約四ヶ月半を費して、臘虎四十三頭、臘肭臍六百頭を獲、之を賣却して九千弗を收めたり、然れども同盟者の中に軋轢を生じて、再び事を共にすること能はざるを以て、一千八百八十九年四月、彼は去つて友人五名と好奇の極なる北方探險を催し、纔に二十二呎の老朽せる小舟に乗じてバンクーパーを發す、幾度か死地に陥つて辛うじてスキナ河口の鮭漁場に達

し、鐵詰製造所に雇はれ、或は薪切り出しの受負をなして信用を受け、或は漁業に従事して日本人の鮭を捕ふるに巧妙なるを賞せられ漸次に日本人の移り來れる者を糾合して其牛耳を把り、一千八百九十一年佛人の所有地百六十エーカーを家屋什器附屬の儘に買取り、始めてスキナ河口に日本人の紳士を現出したり、彼は今六百九十人の同胞を其周圍に吸収して、小也と雖も加奈太日本人の王を以て呼ばれ、漁業に兼ねて農耕牧畜を行ひ、今年の冬は五萬尾の鮭を鹽漬にして日本に携へ來るべしと意氣込みつゝあり

時代は我が波濤の健兒に許すに倭寇の事を行ふを以てせず、唯倭寇の意氣、倭寇の抱負、渾て其血管の中に遺傳し來れる負嫌ひの氣を善用して、貿易、探險、開墾、漁獵等、あらゆる平和の戦争——

時として或は少しく平和ならざる事業に於ても、北極の南、南極の北に日本人の賊の聲を滿たしむべく、我等の同胞が、友人が、昨日

も往き、今日も往き、明日も亦往くべく傾向せるを喜ぶ、願くは、百の郡司成忠、千の奥平忠善、萬の相川之賀を地球の到る所に散在せしめて、彼等の爲すが如くに爲せし祖先伊弉諾伊弉册二尊を祭らしめん

海賊が説明する日本

一樓の系統……國自慢の入種……廣告の爲めに
生命を賣りに行く……狂的競争心

銀月『日本海賊史』を編せんとして、史書及び記録に断片零碎の材を拾ひ、先づ之を一筐に充たしむ、既にして紙を展べ筆を下さんとするに臨み、筐を覆して机邊に其底を叩けば、我を繞つて室内皆稿紙、恰も秋末の萬葉重積して銅佛の膝を埋むるが如し、到底之を経緯して一匹の錦綵を織り成すの勞に堪ふべからず、乃ち、最も色彩に富めるもの、最も趣致に饒なるものを其中に擇び、纔に綴つて此一巻をなし、上は伊弉諾伊弉册より、下は郡司成忠、相川之賀の徒に至る迄の一縷の系統をば、之を挾める周圍の濃彩に依りて、出來得る限り讀者の眼に顯著ならしむるの目的に停めぬ、其一括して

火中に投じたる餘材の煙中に、或は一二の供養に漏れたる幽霊を現出せしやも知らずと雖も、予が目的に重要なるの人物は、大抵此小冊中に網羅し得たるを信ず、而も予の描寫は陰影を帶ばしめたる密畫にあらざ、線に依りたる疎畫なるのみ、幸に各奇傑に特殊なるの面目を區別し得ば足れり、故に時を異にしたる同型の人物は、成るべく之を舉げて對照すべく試みしと雖も、代を同じくしたる同型の人物に至りては、成るべく其重なる者一個——已むを得ずんば一個以上を舉げて、之に他の多數の者を代表せしめたり、又、代を同じくしたる二個の人物にして、表面毫も相似たる如き點無き者が、不思議に相投じて一致の方向に傾きたるの奇觀あれば、皮を剥ぎ又皮を剥ぎて、遂に深底に潜める同質の物を見出だすべく力めたり、此に於て予は此書が何を説明したるかを述べざるべからず

予の日本海賊史が何を説明したりやとの問題は、一步を進めて日

本の海賊が何を説明したりやとの問題に移らざるべからず、爾り、日本の海賊は日本を説明したり、日本人を説明したり、予は更に此書を總括して、海賊が説明するの日本人を見んとす

日本人は恐ろしき國自慢の人種也、世界に國自慢の人種多しと雖も、此點に於て日本人に勝れる者あるを見ざる也、種々の點に於て日本人に勝れる人種少なからずと雖も、此國自慢の點及び國自慢の爲めには何物をも犠牲に供して惜まざるの點に於て、如何なる人種も日本人の前に立つこと能はず、是れ國土の位置形勢及び絶好なる風景と氣候——即ち地理の感化也、地理に作られたる歴史の感化也、而して尙一層複雑に、地理の感化と地理に作られたる歴史の感化との合併作用より來りたる感化也、此國自慢は内に對して熱烈なる愛國心となり、外に向つては世界の何者にも讓歩せざるの狂的競争心となり、獨り他に負くることを厭ふのみならず、日本の國民は汝等

と遙に段違ひの高手也との自慢を、他の前に於て述ぶるに至らざれば食ひ足らざる也、此自慢を述べんが爲めには、笑つて油の鏝に飛び込み、喜んで竹鋸の下にも頭を延ぶる者也、叶はぬ時には相手の咽喉筋に喰ひ附いても負けぬ者也、日本人同士御互の間にては、極めて弱く意氣地無き者にて、外に向へば一つの争ひの起ると共に直ぐ様死を決する也、倭寇と稱せられし我が海賊の行動の如きは、此國自慢負嫌ひの根性が、何の理屈にも口實にも裝飾されず、全然裸體的に飛び出だしたるもののみ、財物を掠奪するは彼等が第一の目的にあらずして、單純に日本人はエライぞ強いぞと廣告すべく態々海を渡つて生命を賣りしに行きしもののみ、今日露西亞と戦を交へたるも、詮じ詰むれば左程に六かしき意味あるにあらず、一々算盤珠を弾きて、何に何を加ふれば何になるとの勘定づくより掛りたるものにもあらねば、何の理由に依つて何をすべしと、一々理屈に

當て箝めてより始めたるにもあらず、要するに、『何の、貴様に負けてたまるものか』との一鼓舌が、彼と戦ひを開き且つ彼に戦ひ勝つるの原動力なる也、極めて無意味なるが如き中に極めて深き意味はあ

然れども、一面より見る時は、此甚だしき國自慢が日本人の缺點也、我が區々たる海賊的私兵が、幾たびか高麗王に都を遷さしめんとし、若しくは數十人にして明の州府を陥るゝが如き奇功を奏せしは、是れ國自慢より出でたる負け嫌ひの結果に相違無し、而も、疾く我が領地の一部分として、天長節には日の丸の國旗に蔽はるべき筈なる、四百餘州の漢土及び鷄林八道の山河が、不思議にも今に日本の年號を用ひざるは、亦是れ日本人が國自慢より出でたる愛土病の賜と云ふの外無し、蹈み荒しては國に歸り、掠め取つては國に歸る、我が海賊若し爾かせずして、征略の傍ら植民を行ひ、州府を

取りては軍隊に保護せられたるの統治者を置き、若々一端より地盤を固めて、地圖の色を塗り換へ行かば、今日何ぞ對韓政策對清政策に無用の力を費やすを要せんや、餘りに故國の自慢に過ぎて、自慢すべく新しき國を作ること知らざるの日本人は小なる哉

總括して云ふ、海賊の説明する日本人は國自慢の人種也、其國自慢の爲めには、自己の有する所の有形無形總ての物——勿論生命をも絲瓜の皮の如くに抛棄して、世界の何者にも讓歩せざる狂的競争心を起すの人種也、爾り唯是れ而已、嗚呼唯是れ而已

日本海賊史畢

附 錄

天才的國民

冷かなる強さと熱したる強さとあり、氷の強さと火の強さとあり、冷かなる強さは野蠻人の誇りにして文明人の誇りにあらず、冷かなる強さは残忍なり、残忍は獸性なり

強きこと若し人間の誇りならば、汗は熱したる強さならざるべからず、發奮して超實我の境に上りたるの強さならざるべからず、平易に云へば夢中になりたる強さならざるべからず、恰も天才の人が興來つて超實我の境に上り、驚くべき靈妙の動作をなして自ら其然る所以を知らざるが如くならざるべからず、而して實に、日本人の

強さは超實我の強さなり、夢中の強さなり、天才的強なり、歴史之を證す、現在之を證す。

日本人は能く夢中になるの民族なり、夢中になりて狂的動作をなすの民族なり、此自ら知らざるの狂的動作は、能く日本人をして普通人間の達し得る最高潮以上に昇騰せしむ、其經過の状態毫も天才の頭腦が驚くべき大産物を陶鑄し出だすの時に異ならざるなり、誰か日本人を稱して天才的國民なりと云ふを非定し得る者ぞ

歴史の力や大なり、高天原より大倭に來りて建國の基礎を固めし、伊弉諾、伊弉册、大日靈貴、素盞鳴の夫婦親子同胞四尊共に絶世の英雄にして、時代の國民を感化し及び國民の子孫を其遺芳に薰じ、永く日本人に英雄的趣味を帶ばしむべき精神教育の源泉となり、醗酵的分子を其末流に送り出だして、今猶ほ三千年前の醉を醒まさしめざるなり、而して一面に於ては、氣候と地理との祝福少なき舊地

より日本の樂園に移住したる我等の祖先は、絶美なる風光に刺戟せられ、絶好なる氣候に涵養せられて、忽ち其腦裡の固く蕾める花を開き、多感多情の種族となり、日本人の特質を作りて一種天才的狂氣を帶べるの國民となしたるなり

日本人の強さは、天才が興來りたる時に於けるの状態を以て、能く夢中の境に入るの強さなり、既に夢中の境に入れば、理法は更に心的状態に一段の餘地を生ぜしむ、或は熱烈となり或は冷靜となり、時と處に應じて適當なるの動作は、自ら知らずして這裏より出づるに至るなり、太平記に見ゆる勇士の如き、殆んど無意味に無目的に、唯敵中に入りて死するの快？を取らんが爲に、一騎或は二三騎にて味方を離れ、悠々緩々と進み行きて再び歸らざる者少なからず、又南北朝時代の末に於て最も明國に恐慌を與へし大倭寇の或る一部隊の如き、僅々六七十人を以て錢塘江畔の數百里を横行し、人を殺す